

## B III 部

---

### 態拡張による新動詞の発生

動詞は態形式の適用を受けて自動詞から他動詞を、他動詞から自動詞を形成したり、態補強をしたりする。本書ではこれを「態拡張」と呼ぶのであるが、B III部ではこれについて考える。

日本語の動詞は歴史的に態拡張の形で数を増して今日に至っているので、通時的な変化の跡をたどって考察することによって動詞の実相をとらえることができる。

B 8章では、動詞の態を拡張させてきた24方式を考えるための基本について述べ、その24方式の体系表を作成する。また、動詞別態拡張の個性を分類できるようにするための表を作成する。

B 9章では、動詞態拡張24方式のそれぞれを検討する。これにより、動詞の自他の対応関係が体系的に把握できるようになる。



## B 8 章

### 動詞態拡張24方式

#### B8.1 動詞の態を拡張する形態素

日本語の動詞は本来の動詞に一定の態機能をもつ形態素を付加する形で拡張され、数を増加させた。

日本語の動詞は、万葉集や古事記などの文献が記録として残される時代よりはるか以前には数が限られていた。人間の社会が発展し、生活が複雑さを呈し始めると、人間の生活を始めとするさまざまな事象に対する意識・認識も精細になっていき、それを表現する動詞はきめ細かな表現ができるように対応せざるを得なくなった。そこで、限られた数の動詞を基に、自動詞からは他動詞が、他動詞からは自動詞が生み出され、また態の補強が行われた。この現象を本研究では「態拡張」と呼ぶのであるが、この態による拡張を得て、日本語の動詞は数を増し、事象を描き出す際のより高い自由度を手に入れることになった。

態による拡張に使用された態詞（態の形態素）には次のようなものがある。

-ar-	-as- (-s-)	-e- (-i-)
-ay-	-ur-	-∅-

原因態（使役態）を表す「しむ -asim-, -sim-」という態詞が奈良時代に使用されていたが、これは平安時代になると和文においては -as- に取って代われ、その使用が極めてまれになった。形態的には -asim-, -sim- から im がはずれたことになる。構造は -as-, -s- と同様のものなので、表中には特に im を示さない。必要があれば -as-, -s- の構造で代用することにする。

なお、B 7 章において古代母音の甲類乙類の区別は基本的に 5 母音の存在を

示すものであることが判明しており、本章では、考察に支障を生じないことが明らかなので、この甲類乙類の区別は必要の場合のみ言及することにし、その他の場合は言及しないことにする。形態表記も音声表記ではなく音素表記とする。それで、たとえば「フ」はFu, fu, Φuではなく、huで表記する。

態による拡張には「原動詞」と「主体」「目的格客体」「態属性」「態主体」との関わりから22の方式を数えることができ(表B8-8~表B8-11)、これにさらに「非を格客体」の関わりによる2方式(表B8-12)を加えて、合計24の方式を見いだすことができる(これは現在の研究段階での数字であり、今後新たな方式を追加する必要性が出てくる可能性もある)。

## B8.2 2種類の態

「態」(態属性)には新動詞(語幹)を形成するかしないかで、2種類のものを考えることができる。①「新動詞形成態」と、②「非新動詞形成態」である。①「新動詞形成態」……動詞の態関係を表示するばかりでなく、その態関係において新たな動詞(語幹)を生成するタイプの態属性。たとえば-as-という原因態は動詞「動くugok-」において「動かすugok-as-」という原因態態表示を行うばかりでなく、この関係から新動詞「動かすugok;as-」を生んだ。このような態属性-as-は「新動詞形成態」として機能している。

ugok- (動く……自動詞)

ugok-as- (動かす…原因態)

ugok;as- (動かす…他動詞)

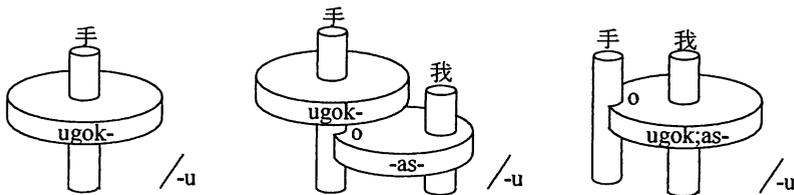


図 B8-1 手が ugok-u 図 B8-2 手を ugok-as-u 図 B8-3 手を ugok;as-u

②「非新動詞形成態」……動詞の態関係を表示するが、新たな動詞(語幹)を生成しないタイプのもの。たとえば-as-という原因態は動詞が「座る suwar-」

の場合「座らす suwar-as-」という原因態表示を行うだけで、新たな動詞を生むことはない。このような態属性 -as- は態の関係を表示するだけの態詞、つまり「非新動詞形成態」として機能している。

(ちなみに言えば、この例の「座る suwar-」は①で扱うと「据う suw-」の [T4] 拡張方式で現代語化したものということになる。suw;ar-)

suwar- (座る……自動詞)

suwar-as- (座らす…原因態)

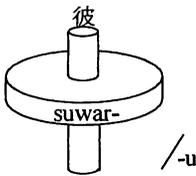


図 B8-4 彼が suwar-u

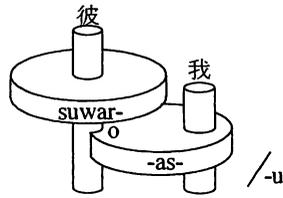


図 B8-5 彼を suwar-as-u

以上の2種類の態が区別されるものとする。①は通時的に形成され、②は共時的に運用される。

①②は「態」の基本形式にのっとって形成されるが、本章では特に①のタイプの態を扱う (B I 部では②のタイプの態を扱っている)。

本章で全24の拡張方式を表 (表 B8-8~表 B8-12) により示す。そのあと B 9 章で各方式に言及する。

もし②を考慮するならば、

- (r)ar-e- 形式の「尊敬」 (- (r)ar- の主体が発話者意識)、

- (s)as-e- 形式の「可能」 (-e- の主体が動詞の客体)、

- (r)ar-e- 形式の「可能」 (- (r)ar- の主体が動詞の客体)

をも扱うために、それぞれの基 (複合定形式) を追加する必要がある。これらを含める形で新たな表を作成し、表 B8-8~表 B8-12 のそれぞれの下に付け加えることになる。

ただし、「合はす ah;as-」のように、表中 / 3 / の段階 (現代語的感覚) になった動詞がさらに①の原動詞相当として機能し、さらに態拡張する (合はさる ah;as;ar-) ものものもある。

## B8.3 原動詞に関して

原動詞には「聞く kik-」のような本来の動詞のほかに、① 融合動詞「乗る nor-」や② 併合動詞「蘇る yomigaher-」のような、名詞を中に含んで原動詞となったものがあり、③ 構成不明原動詞「汚す kegas-, 汚る kegar-」のように名詞を中に含むかどうか不明のものがある。また、④ 推定上の原動詞「上ぐ ag-」のように原動詞としての存在が実証はできないが想定されるものもある。⑤ 同一原動詞でも、どの意味を使用するかによって態拡張方式の異なる動詞、⑥ 自他共通原動詞、⑦ 一段活用動詞もある。加えて、⑧ 変格活用動詞もあるが、この⑧については節を改めて言及する (B8.4)

本節においては①～⑦について述べる。

## B8.3① 融合動詞

「乗る nor-, 乗す・載す nos-」という動詞は実詞「荷 nō」が自動詞形式的動辞 .r-, 他動詞形式的動辞 .s- と融合 (A17.1 ④) して作られた融合動詞であり、nō.r- / nō.s- という形式をしている。つまり、名詞を元にして作られた動詞である。このような融合動詞は原動詞として機能する。「乗る nō.r-」は [Z1] の動詞であり、「載す nō.s-」は [T3] の動詞である (図 B8-6, B8-7 参照)。以後、nor-, nos- と表記する。

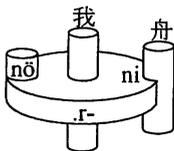


図 B8-6 我の舟に nō.r-

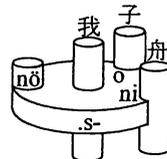
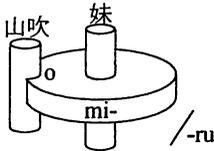
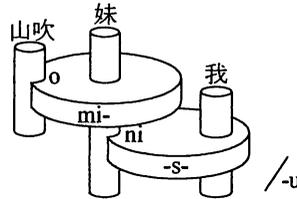


図 B8-7 我の子を舟に nō.s-

「重ぬ…嵩 (kasa).n- [T3] [T4]」, 「改む…新 (arata).m- [T3] [T4]」, 「伝ふ…薦 (tuta).h- [Z1] [Z2] [Z4]」等も融合動詞である。

なお、「見る mi-ru, 見す mi;s-u」もこの関係に似ているように見えるが、これは異なるものである。「見る mi-ru」([T1] 動詞) の mi- はすでに動詞で

あって、これは、否定にすれば *mi-zu* となることから確認できる。したがって、*-ru* は動辞ではなく描写詞である (図 B8-8)。「見す *mi;s-u*」 ([T8] 動詞) の *;s-* も動辞ではなく、こちらは態詞 (*-s-*) である (図 B8-9)。

図 B8-8 妹の山吹を *mi-ru*図 B8-9 我の妹に山吹を *mi;s-u*

### B8.3② 併合動詞

「蘇る *yomigaher-*」という動詞は「黄泉」という名詞と「帰る」という動詞から成立している。名詞と動詞であるから、格関係で結ばれているはずで、このときの格は *kara* である。構造で示せば図 B8-10 のようになる。

名詞と動詞の関係にあるものが一語化したものであるから、当文法でいう「併合」(A17.2 ⑫) の関係にあり、*yomi=kaher-* と表示する性質のもので、併合動詞である。

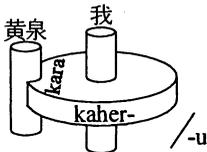


図 B8-10 我のよみかへる

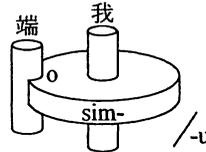


図 B8-11 我のはしむ

また、「始む *hazim-*」という動詞は『岩波古語辞典』(「はじ・め」)によれば「ハ(端)」と「シメ(占)」との複合により形成された語 *ha=sim;0-* であるということであるから、これも併合動詞ということになる (図 B8-11)。

この両者は原動詞としては *yomigaher-*、*hazim-* の表示となり、図 B8-12、B8-13 のような図示となる。

現代語の「懂れる *akogare-*」も元来併合動詞「懂る *aku=kar-*」であった。

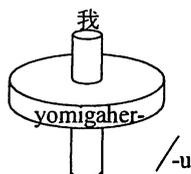


図 B8-12 我のよみがへる



図 B8-13 我の事はじむ

### B8.3 ③ 構成不明原動詞

たとえば「汚す kegas-」「汚る kegar-」という動詞は融合動詞のようにもともと kega という名詞があって形成された原動詞なのか、keg- という動詞が -as- / -ar- により態拡張して形成された動詞、つまり非原動詞なのか、情報不足のために決定することができない。このような場合、kegas- / kegar- をそれぞれ原動詞として扱うことにする。今後何らかの情報が得られれば決定できるが、それまでは「構成不明原動詞」ということになる。

同様の動詞として「倒す tahus-」「倒る tahur-」, 「汚す yogos-」「汚る yogor-」, 「渡す watas-」「渡る watar-」などがある（「渡す, 渡る」は「海 wata」の関わる融合動詞 watas- / watar- として確認される日が来るかもしれない。そのときは「構成不明原動詞」ではなくなる）。

### B8.3 ④ 推定上の原動詞（動詞語幹）

「上ぐ ag-」という動詞は記録時代には下二段活用 (ag;ë-, 図 B8-14) になっており、子音幹動詞（四段活用 ag-）は存在していないが、下二段活用の終止形が ag;Ø-u (図 B8-15) であることや、「上がる ag;ar-」(図 B8-16) という他の態拡張動詞があることから、許容態発生以前には四段活用の他動詞「上ぐ ag-」が原動詞として存在していたことが理論的に推定できる。



図 B8-14 男の<sub>i</sub>名を上げ



図 B8-15 男の<sub>i</sub>名を上ぐ

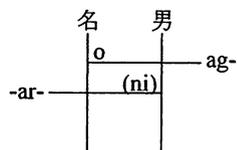


図 B8-16 名の<sub>i</sub>上がる

このように許容態発生以前に、つまり  $-ë-$  (ないし  $-i-$ ) が付く以前に、理論的に存在の想定できる原動詞を「推定上の原動詞」と呼ぶ。

同様の原動詞として「落つ  $ot-$ 」「枯る  $kar-$ 」「冷む・覚む  $sam-$ 」「締む  $sim-$ 」「果つ  $hat-$ 」等、多くのものがある。「閉づ  $tod-$ 」「恥づ  $had-$ 」「跳ぬ  $han-$ 」のように他の態拡張形式をもたないものもある。

### B8.3⑤ 意味により拡張方式が異なる原動詞

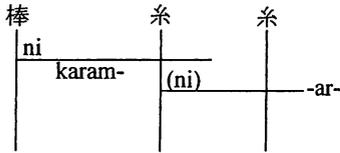
「受く  $uk-$ 」という動詞は『岩波古語辞典』(う・け)によれば、「自分に向かって来るものを、心構えして迎え入れる意が原義」であるが、態拡張方式はより具体的な意味のあり方に応じて異なっている。同辞典の同項目②「人が行うこと、さずけることなどに応じる。」の意味において使用される「大学(の試験)を受ける  $uk;e-$ 」の「受く  $uk-$ 」の場合は態補強の [T3] 方式 ( $uk;e-$ ) で拡張しており、同項目の④「人柄や、物のあり方を認める。受け入れる。」の意味で使用される「大学に受かる  $uk;ar-$ 」というときの「受く  $uk-$ 」は受影の [T4] 方式 ( $uk;ar-$ ) によって拡張している。このように、同じ原動詞でも意味に応じて態拡張の方式が異なることがある。

同様のもののもう1つの例として、「分く  $wak-$ 」を挙げることができる。これは『小学館古語大辞典』の「別く、分く」の項の①「別々にする」の意味のときは [T3] ( $wak;e-$ ) 及び [T5] ( $wak;ar;e-$ ) として拡張し、②「理解する」の意味のときは [T4] ( $wak;ar-$ ) として拡張する。

### B8.3⑥ 自他共通原動詞

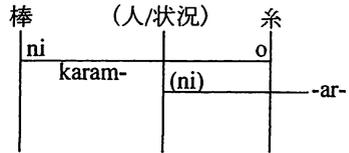
原動詞「絡む  $karam-$ 」には自動詞と他動詞がある。それで、たとえば「糸が棒に絡まる  $karam;ar-$ 」の文で使用されている「絡まる  $karam;ar-$ 」という形の動詞は、原動詞「絡む  $karam-$ 」を自動詞とみる場合は「糸が棒にからむ  $karam-$ 」の構造から生じたものと考え(図 B8-17)、他動詞とみる場合は「(人・状況が)糸を棒にからむ  $karam-$ 」の構造から生じたものと考えることになる(図 B8-18)。したがって、この原動詞「絡む  $karam-$ 」は自動詞である場合は [Z4] に属し、他動詞である場合は [T4] に属することになる。この「絡む  $karam-$ 」のように自動詞と他動詞のあり方をもつ原動詞を「自他共通

原動詞」という。



原自動詞

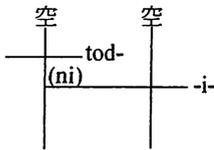
図 B8-17 糸が棒にからまる



原他動詞

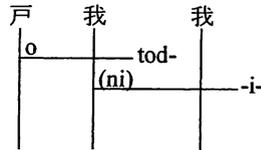
図 B8-18 糸が棒にからまる

「閉づ tod-」も自他共通原動詞である。この「閉づ tod-」は、原自動詞 [Z3] である場合も、原他動詞 [T3] である場合も、-i- による態補強を受けるので、「(空が) 閉ぢる tod;i-」(図 B8-19), 「(戸を) 閉ぢる tod;i-」(図 B8-20) となる。



原自動詞

図 B8-19 空が閉ぢる



原他動詞

図 B8-20 (我<sub>o</sub>) 戸を閉ぢる

このように、「自他共通原動詞」では原自動詞と原他動詞が同形式である。

### B8.3⑦ 一段活用動詞

原動詞として扱う動詞として上一段活用をするものと下一段活用をするものの存在を考えておく必要がある。

#### i) 上一段活用動詞

上一段活用動詞は語幹が i- で終わり、表 B8-1 の活用をする。

表 B8-1 上一段動詞活用表

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
xi-(zu)	xi-Ø	xi-ru	xi-ru	xi-re	xi-yo

原動詞として考えられる上一段動詞としては次の10語がある。

射る i-, 鋳る i-, 沃る i-, 着る ki-, 似る ni-,  
煮る ni-, 簸る hi-, 見る mi-, 率る wi-, 居る wi-

ただし、研究が進めば、これらも本来的な上一段動詞ではないことが判明するかもしれない。そのときは、原動詞は子音幹動詞のみになる。

「居る wi-」は（終止形しか確認できない）上二段動詞「う（居）w-u」の一段化したものともいわれ、原動詞でない可能性がある（p. 147 コラム 4 参照）。

原動詞としての上一段動詞は態拡張を受けなかったので、[方式 1] (B9.1) に属するものとなる。半数ほどは現代語としてそのまま一段動詞として使用されている。

態拡張についていえば、「着る ki-、似る ni-、見る mi-」が原因態の -s- と許容態の -e- (-ur-) により、下二段活用化して新他動詞を形成している (B9.8 [Z8] [T8] 参照)。

（「煮させる、煮られる」のような形式は動詞の原因形、受影形であり、態拡張により発生した新動詞であるわけではない。）

なお、ほかに上一段動詞10語を挙げることができるが、これらは原動詞とは考えられない。

干る hi-	乾る hi-	噓る hi-
後見る usiro=mi-	惟ひみる omoh-i=mi-	顧みる kaher-i=mi-
鑑みる kanga=mi-	試みる kokoro=mi-	
率ゐる hikiwi-	用ゐる motiwi-	

「干る・乾る hi-」「噓る hi-」はそれぞれ上二段動詞「ふ（干・乾）h-」「ふ（噓）h-」が一段化したものと言われる（『日本文法大辞典』等、p. 147 コラム 4 参照）。

「後見る」～「試みる」の「…みる」は原動詞「見る」との複合語である。

「率ゐる hikiwi-」は「引く hik-」と「率る wi-」の連合 (A17.2 ㊹) したもので、「hik-i=wi-」と分析でき、「用ゐる motiwi-」は「持ち率る mot-i=wi-」と分析できる。

## ii) 下一段活用動詞

下一段活用動詞は e 語幹末動詞であるが、原動詞として考えられるものは存在しない。平安時代に下一段活用動詞「蹴る kwe-」があったが、これは奈良時代に下二段活用していたものがいち早く一段化した（鎌倉時代を待たずに -ur- が -e- に統一された）ものである。唯一下一段活用動詞とみられる「蹴る」が

原動詞としての下一段活用ではないので、原動詞としての下一段活用の動詞は存在しないものと考えられる（なお、この動詞は、江戸時代後期よりはrを語幹に取り込み ker- を語幹とすることとなった）。

表 B8-2 「蹴る」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	kuw:e-(zu)	kuw:e-Øi	kuw:Ø-u	kuw:ur-u	kuw:ur-e	kuw:e-yo
平安	kw:e-(zu)	kw:e-Øi	kw:e-ru	kw:e-ru	kw:e-re	kw:e-yo
江戸後期	ker-(azu)	ker-i	ker-u	ker-u	ker-eba	ker-e

注) 奈良の kuw: Ø-uは kw: Ø-uの可能性もある（『小学館古語辞典』等）。

## B8.4 変格活用動詞

原動詞について考えるには、変格活用動詞の存在についても考えておく必要がある。

文献時代初期（奈良時代）において4種類の動詞が変格活用をしている。このうち、i) ナ変動詞、ii) サ変動詞、iii) カ変動詞の3種類の動詞は、原動詞が対自許容態による態拡張をするに際して、第2期（-ë- / -i-）には態拡張を受け入れず、第3期（-ur-）になって受け入れた結果として変格活用を生じたものと考えられる（この原因については、今後の研究に待ちたい）。

もう1種類の変格活用動詞、iv) ラ変動詞の場合は終止描写詞が -u ではなく -i であることに特殊性があったが、これは鎌倉時代までで終結し、以後は他の動詞と同様の -u になった。

### i) ナ変動詞

ナ変の「死ぬ sin-」については、許容態が -e- である時期には許容態を採用せず sin- のままであったが、許容態が -ur- 形式となった時期以降にはじめて許容態を採用したのと考えられ、態補強という形で態拡張した。

連用形等に許容態 -e- がなかったために、他の一般的な下一段活用化動詞（許容態によって態拡張した動詞）と異なり、-ur- が -e- に統合されて一段活用化するということがなかった。

表 B8-3 「死ぬ」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記	sin-azu	sin-i	sin-u	sin-u	sin-e	sin-i-a
奈良	sin-azu	sin-i	sin;Ø-u	sin;ur-u	sin;ur-e	sin-e
室町	sin-azu	sin-i	sin;ur-u	sin;ur-u	sin;ur-e	sin-e
現代	sin-ana(.k)-i	sin-i	sin-u	sin-u	sin-eba	sin-e

注) 表中の「前記」とは「前記録時代」の意味である (p. 124).

-ur- は一時的に存在しただけで、江戸時代後期までに消失した。遅れてわざわざ許容態を採用して態補強をしたものの、結局必要がなかったので -ur- を捨てた、ということであろう。その結果、子音幹動詞にもどり、四段活用にもどった。もう1つのナ変動詞である「去ぬ in-」は、現代語に至る前に語自体が消失した。

ナ変動詞は態補強の [Z3] に準ずるものとして [Z3] に収める場合と、結局態拡張がなかったことになるので無変化の [Z1] として扱う場合がある。

【助動詞 ぬ (=n-/=n;ur-)】は、動詞ではないが、ナ変動詞「去ぬ in-」の「去 i」の部分が脱落したものと考えられており、「去ぬ in-」に準じたものとなっている。表 B8-4 下線部のような活用となっている。表中の -i は前接動詞の連用形である。

この場合は、終止形等への許容態 -ur- の適用が鎌倉・室町時代に実現したものの、結局、助動詞としての役割(機能)を室町時代に成立した助動詞「た」に奪われ、江戸時代には形式自体が消失している。

表 B8-4 助動詞「ぬ」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	-i <u>n</u> -amu	-i <u>n</u> -i	-i <u>n</u> ;Ø-u	-i <u>n</u> ;ur-u	-i <u>n</u> ;ur-e	(-i <u>n</u> -e)
室町	ナシ	ナシ	-i <u>n</u> ;Ø-u	-i <u>n</u> ;ur-u	-i <u>n</u> ;ur-e	ナシ
現代	消失					

## ii) サ変動詞

サ変動詞の「する s-」はナ変動詞「死ぬ sin-」同様、許容態が -e- 形式であった時期には許容態を採用せず、許容態が -ur- 形式となった時期になってはじめて許容態を採用したのと考えられ、「態補強」という形で態拡張

した。表 B8-5 のように活用が変化した。

表 B8-5 「す(る)」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記録	sy-azu	sy-i	sy-u	sy-u	sy-e	sy-i-a
前記録	s-ezu	s-i	s-u	s-u	s-e	s-i-a
奈良	s-ezu	s-i	s;∅-u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -e	s-e-yo
室町	s-ezu	s-i	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -e	s-e-yo
現代	si-na(k)-i	s-i	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -eba	s-i-ro

ナ変動詞と同様、許容態 -e- を持たなかったために、一般的な下一段活用化動詞と異なり、-ur- が -e- と統合して、一段化するということがなかった。また、ナ変動詞「死ぬ」と異なり、サ変動詞「する」は -ur- がその形のまま保たれ現代に至っている。使用頻度の違いによる熟合度の違いがこの相違をもたらしたのであろう。

サ変をもたらした原動詞の語幹は恐らく sy- であったのであろう（否定形の形態 se-, および命令形の形態 s-e についてはこれで説明がつかだろう）。表中では sy- を原動詞として扱ってあるが、記述上は s- の表記にしておく。否定基 -azu については『文法』30.5 参照。

「する s-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥)であり、「音がする」のような自動詞としての s- は [Z3] として扱い、「国見をする」のような他動詞としての s- は [T3] として扱うことにする。

「愛す 愛=s-」「略す 略=s-」等、漢字一字に =s- が付いてできた語（併合動詞 B8.3②）は、現代語では一部五段動詞としても用いられる。これは、態補強としての許容態がはずれたものと考えられる。

「感じる 感=z;i-」「信じる 信=z;i-」「応じる 応=z;i-」等、一字漢字が撥音や長音で終わり、s- が z- となっているものは現代語では上一段動詞としても用いられる。これは連用形を語幹化したものと考えられる。

### iii) カ変動詞

カ変の「来る k-」は、サ変と同様に考えることができる。

表 B8-6 「く(る)」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記録	kw-azu	k-ī	k-u	k-u	k-e	k-ī-a
前記録	k-ōzu	k-ī	k-u	k-u	k-e	k-ō
奈良	k-ōzu	k-ī	k;∅-u	k;ur-u	k;ur-e	k-ō
室町	k-ozu	k-i	k;ur-u	k;ur-u	k;ur-e	k-oi
現代	k-ona(k)-i	k-i	k;ur-u	k;ur-u	k;ur-eba	k-oi

許容態の -e- 形式を持たなかったために許容態形式の合一化現象が起こらず、未然・命令用法を除き、そのまま現代語に至っている。現代語でも依然として -ur- を保ってはいるが、これは態補強の方式 [3] に準ずる [Z3] として扱うのが最も適当である。

原動詞の語幹として kw- を想定しているが、さらに検討が必要である。

#### iv) ラ変動詞

ラ変の「あり ar-」は態拡張しない [Z1] 動詞であるが、他の [Z1] 動詞と異なるのは奈良時代の基本描写詞（終止形態素）が -u でなく -i（下線部）であることである。表中では [Z1] に収める。

表 B8-7 「あり」活用の変遷

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	ar-amu	ar-i	ar- <u>i</u>	ar-u	ar-e	ar-e
室町	ar-amu	ar-i	ar-u	ar-u	ar-e	ar-e
現代	ar-oo	ar-i	ar-u	ar-u	ar-eba	ar-e

終止形の -i が他の動詞同様の -u に変化したのは鎌倉・室町時代である。

## B8.5 態拡張の記号表示

態拡張の様相の全体を把握しやすくするために「態拡張表」(表 B8-8～表 B8-12)を作成した。本節では表中で使用する記号について述べる。

### B8.5 ① 主体・客体の表示

古語の態拡張する前の動詞を「原動詞」(「形態源動詞」)と名付け、これに関

わる実体（主体・客体）を記号で表す。

- 「原動詞主体」…… A  
 「原動詞目的格（を格） 客体」…… B  
 「態主体」…… C （A, B と同一の場合もある）  
 「に格」を中心とする非を格 客体 …… X （図 B8-24 の「猿」参照）

これを構造例で示せば 図 B8-21 のようになる。記号を具体的な名詞で示せば 図 B8-22 のようになる。



図 B8-21 C が A に B を kik-as-e- 図 B8-22 父親が息子に詩吟を kik-as-e-

図 B8-21 では原動詞は kik- である。これが態拡張の要素 -as- と -e- により kik;as:e- という他動詞になっている。態拡張をひきおこす -as- は原因態形態素であるが、これは B2.1 でいう直接他動の用法である。他動詞を構成している。

kik;as:e- 中の -e- は許容態形態素である。許容態 -e- には対他許容と対自許容とがある。「対他許容」の -e- は主体・客体関係を変えるが、「対自許容」の -e- は「態補強」で、主体・客体関係を変えない (B3.4 参照)。図 B8-21, B8-22 での -e- は、C が C を許容する「対自許容」であり、後者である。

### B8.5② 表中での ni 格実体の表示省略

態拡張表では、図示において、ni 格の実体を省略して示している。たとえば、表 B8-9 の [Z8] 1 の ni;s- (図 B8-23) の ni- は「猿に似 (ni-) る」のように「猿」という ni 格の実体を取るが、図にはこれを表示していない。これを表示する場合は点線で示すこともある (図 B8-24)。記号表示は X とする。

表中に示される諸形態は「語」の形成に関わるものであり、[Z1], [T1]

を除き新語幹を形成する（ただし、古代動詞敬語形式を含めている）。B8.2 で言及した①「新動詞形成態」に関わるものである。

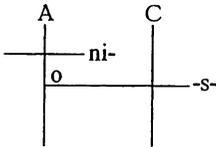


図 B8-23 C が A を ni-s-

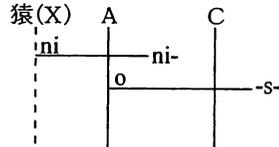


図 B8-24 C が A を猿(X)に ni-s-

### B8.5 ③ 記号の意味

態拡張表の中で使用する記号の意味は次のとおりである。

たとえば「自 ase 他」とある場合、左側の「自」は原動詞の自他の区別を表し、右側の「他」は中央の態形式 ase が付加されて態拡張した結果生ずる新動詞の自他の区別を表している。

自 ∅ 自 …… 原自動詞に態変形が生じず、自動詞のまま。

自 ase 他 …… 原自動詞に -as-e- が加わって、新他動詞形成。

自 e/i 自 …… 原自動詞に -e- ないし -i- が加わって態補強自動詞へ。

他 e 自 …… 原他動詞に -e- が加わって、自動詞へと態変換。

他 ar 自 …… 原他動詞に -ar- が加わって、新自動詞形成。

自 ○ 自/他 …… 非 o 格客体を主体化描写する場合に、ある態 (○) が原自動詞に加わって、新自動詞ないし新他動詞形成。

表 B8-8, B8-9 は原自動詞の態拡張の表であり、表 B8-10, B8-11 は原他動詞の態拡張の表である。表 B8-12 は非 o 格客体が主体化描写される場合の態拡張表である。

これらの表中で使用される記号・数字の意味は次のとおりである。

Z …… 原自動詞 [Z1]～[Z11] [Zn] …… 原自動詞態拡張の種類

T …… 原他動詞 [T1]～[T11] [Tn] …… 原他動詞態拡張の種類

/0/ …… 原動詞の段階

/1/ …… 受影態・原因態適用の段階 …… -ar-, -as-, -s-, -ay- 適用

/2/ …… 許容態適用の段階 …… -e- (-i-), -ur-, -∅- 適用

/3/ …… 現代語の段階（現代語的感覚での動詞語幹）

＃ …… 奈良・平安（場合によっては中世以降の）時代に、態補強において二段活用とともに四段活用も存在することを示す。

-ur- …… 中抜き文字は前記録時代の推定形式であることを意味する。

前, 前記 …「前記録時代」の意味。奈良時代より前の時代。

なお、本章では態拡張に24方式あるとしているが、これには態拡張をしない方式 [1] を含めている。態拡張の観点から全体を体系としてみると、態拡張しないというのも態拡張の一つのあり方であるからである。

## B8.6 「-e- による態拡張」という記述の意味

特にB9章において「-e- による態拡張」「-i- による態拡張」という趣旨の記述を行うが、これは「許容態による態拡張」と同義であり、態拡張に他の許容態形式 (-ur-, -Ø-) も関わっていることを前提としている。現代語では許容態形式は -e- (-i-) のみになっているが、「-e- による態拡張」「-i- による態拡張」という記述は「-e- のみによる態拡張」「-i- のみによる態拡張」を意味しているわけではない。

## B8.7 態拡張の動詞別状況

ある原動詞が態拡張24方式のうちどの方式によって態拡張したかについて調べてみれば、似た道をたどった動詞もあり、グループにまとめることができる。現代語の状況からはおおむね表B8-13, B8-14 のように35種類のパターンになる。これは歴史的な要素も加味してはいるが現代語中心の扱いなので、徹底したものではない。今後、詳細な通時的調査が進めば、グループが増えるであろう。表は完全な自 (Z) 他 (T) 別の表にし、縦置きにすることになる。

ここで、この表の見方について少し説明しておきたい。

表B8-13 には原自動詞の態拡張19種類が載せてある。○は自動詞、●は他動詞を示している。「拡張形式」の「1：無変化」の欄に○印がある動詞は現

代語にも原自動詞の用法があるものである。

たとえば原自動詞12の「浮く uk-」は、現代語でも「心の根本がしっかりしていない状態になる」の意味で使用され、この意味において「5：浮かれる uk;ar;e-」に拡張している。

原自動詞24「触る hur-」は現代語にはないが、態拡張した他動詞と自動詞の「2, 3：触れる hur;e-」がある。「6：触らす (hur;as-)」という形式は「言い触らす」という複合語の中((○)で表示)にある。

原自動詞28「起く ok-」は現代語にはなく、態拡張した「3：起きる ok;i-」「4：起こる ok;or-」「6：起こす ok;os-」が現代語にある。ただ、これらには多数派の -e-, -ar-, -as- ではなく音転形 -i-, -or-, -os- が使われているので、この音転母音 (i,o) を○印に添えて示してある。

表 B8-14 には原他動詞の態拡張16種類が載せてある。

たとえば原他動詞58「抜く nuk-」は、現代語でも原動詞使用があり、態拡張した「2：抜ける nuk;e-」(歯が抜ける)、「4：抜かる nuk;ar-」(〈気が〉ぬかるなよ)、「9：抜かす nuk;as-」(朝食を抜かす)も使用されている。この場合、「抜く」という1つの原他動詞から2つの自動詞と1つの他動詞が派生したことになる。

表には、概略、以上のような、態拡張の動詞別状況が示されている。

表 B8-8 [Z] 自動詞の態拡張(1)

原動詞	[Z1]0 A   -ugok-	[Z2]0 A   -ak-	[Z3]0 A   -mor-	[Z4]0 A   -mah-	[Z5]0 A   -uk-	[Z6]0 A   -ugok-
受影 /原因態	[Z1]1 -ar -as -s -ay	[Z2]1	[Z3]1	[Z4]1 A   -mah- (ni) A   -ar-	[Z5]1 A   -uk- (ni) A   -ar-	[Z6]1 A   -ugok- C   -as-
対自・他				A対自受影	A対自受影	C対他原因
許容態	[Z1]2 -e (-i) -ur -ø-	[Z2]2 A   -ak- C   -e-	[Z3]2 A   -mor- (ni) A   -e- (-i-)	[Z4]2	[Z5]2 A   -uk- (ni) A   -ar- (ni) A   -e-	[Z6]2
対自・他		C対他許容	A対自許容(態補強)		A対自許容(態補強)	
/現代語的 感覚	[Z1]3 A   -ugok-	[Z2]3 A   -ake- C 	[Z3]3 A   -more-	[Z4]3 A   -mawar-	[Z5]3 A   -ukare-	[Z6]3 A   -ugokas- C 
自・他	自動詞	他動詞	自動詞	自動詞	自動詞	他動詞
記号	[Z1] 自ø自	[Z2] 自e他	[Z3] 自e/i自	[Z4] 自ar自	[Z5] 自are自	[Z6] 自as他
態変化	無変化	態変換	態補強	新自動詞形成(1)	新自動詞形成(2)	新他動詞形成(1)

表 B8-9 [Z] 自動詞の態拡張(2)

原動詞 /0/	[Z7]0 A   —ah-	[Z8]0 A   —ni-	[Z9]0 A   —tat-	[Z10]0 A   —ir-	[Z11]0 A   —sak-
受影 原因態 /1/ -ar- -as- -s- -ay-	[Z7]1 A C   o   —ah- —as-	[Z8]1 A C   o   —ni- —s-	[Z9]1 A A   o   —tat- —as-	[Z10]1 A A   o   —ir- —as-	[Z11]1 A A   (ni)   —sak- —ay-
対自・他	C対他原因	C対他原因	A対自原因	A対自原因	A対自受影
許容態 /2/ -e- (-i-) -ur- -Ø-	[Z7]2 A C C   o     —ah- —(ni)-as- —e-	[Z8]2 A C C   o     —ni- —(ni)-s- —e-	[Z9]2	[Z10]2 A A A   ni     —ir- —(ni)-as- —e-	[Z11]2 A A A   (ni)     —sak- —(ni)-ay- —e-
対自・他	C対自許容(態補強)	C対自許容(態補強)		A対自許容(態補強)	A対自許容(態補強)
/3/ 現代語 的 感覚	[Z7]3 A C   o   —awase-	[Z8]3 A C   o   —nise-	[Z9]3 なし	[Z10]3 なし	[Z11]3 A   —sakae-
自・他	他動詞	他動詞	自動詞(尊敬)	自動詞(尊敬)	自動詞
記号	[Z7] 自 ase 他	[Z8] 自 se 他	[Z9] 自 as 自	[Z10] 自 ase 自	[Z11] 自 aye 自
態変化	新他動詞形成(2)	新他動詞形成(3)	対自原因(1)	対自原因(2)	新自動詞形成(3)

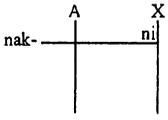
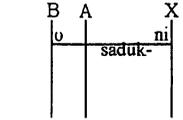
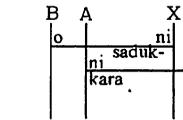
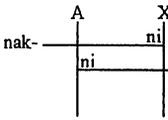
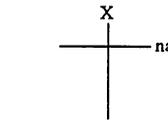
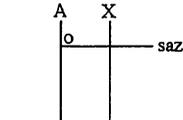
表 B8-10 [T] 他動詞の態拡張(1)

原動詞	[T1]0 B A o kudak-	[T2]0 B A o kudak-	[T3]0 B A o ag-	[T4]0 B A o wak-	[T5]0 B A o sut-	[T6]0 B A o sir-
受影 ／原因態	[T1]1 /1/ -ar- -as- -s- -ay-	[T2]1	[T3]1	[T4]1 B A o wak- ar- ni	[T5]1 B A o sut- ar- (ni)	[T6]1 B A C o sir- ni as-
対自・他				B対他受影	B対他受影	C対他原因
許容態	[T1]2 /2/ -e- (-i-) -ur- -Ø-	[T2]2 B A o kudak- e- ni	[T3]2 B A A o ag- (ni) (-i-)	[T4]2	[T5]2 B B A o sut- e- ar- (ni) (ni)	[T6]2
対自・他		B対他許容	A対自許容(態補強)		B対自許容(態補強)	
/3/ 現代語 的 感覚	[T1]3 B A o kudak-	[T2]3 B kudake-	[T3]3 B A o age-	[T4]3 B wakar-	[T5]3 B sutare-	[T6]3 B C o siras-
自・他	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	自動詞	他動詞
記号	[T1] 他Ø他	[T2] 他 e 自	[T3] 他 e/i 他	[T4] 他 ar 自	[T5] 他 are 自	[T6] 他as他
態変化	無変化	態変換	態補強	新自動詞形成(1)	新自動詞形成(2)	新他動詞形成(1)

表 B8-11 [T] 他動詞の態拡張(2)

	[T7]0	[T8]0	[T9]0	[T10]0	[T11]0
原動詞 /0/ B A o     —sir-	B A o     —sir-	B A o     —mi-	B A o     —nuk-	B A o     —kik-	B A o     —kik-
受影 /1/ 原因態 -ar- -as- -s- -ay- B A C o     —sir- ni     —as-	B A C o     —mi- ni     —s-	B A A o     —nuk- ni     —as-	B A A o     —kik- ni     —as-	B A o     —kik- -ay- (ni) (-oy-)	
対自・他	C対他原因	C対他原因	A対自原因	A対自原因	B対他受影
許容態 /2/ (-i) -ur- -Ø- B A C C o     —sir- ni     —(ni)-as- -e-	B A C C o     —mi- ni     —(ni)-s- -e-		B A A A o     —kik- ni     —(ni)-as- -e-	B B A o     —kik- -oy- (ni) (ni)	
対自・他	C対自許容(態補強)	C対自許容(態補強)		A対自許容(態補強)	B対自許容(態補強)
現代語的 感覚 /3/ B C o     —sirase-	B C o     —mise-	B A o     —nukas-		なし	B o     —kikoe-
自・他	他動詞	他動詞	他動詞	他動詞(尊敬)	自動詞
記号	[T7] 他 ase 他	[T8] 他 se 他	[T9] 他 as 他	[T10] 他 ase 他	[T11] 他 (a)ye 自
態変化	新他動詞形成(2)	新他動詞形成(3)	対自原因(1)	対自原因(2)	新自動詞形成(3)

表 B8-12 自・他動詞の態拡張 (非o格客体の主体化)

原動詞 /0/	[Zn]0 	[Tn]0 
受影 原因態 /1/ -ar- -as- -s- -ay-	[Zn]1 	[Tn]1 
対自・他		X対他受影態
許容態 /2/ -e- (-i-) -ur- -Ø-	[Zn]2 	[Tn]2 
対自・他	X対他許容態	
/3/ 現代語的 感覚	[Zn]3 	[Tn]3 
自・他	自動詞	他動詞
記号	[Zn] 自○自/他	[Tn] 他○他/自
態変化	非o格客体の主体化(1)	非o格客体の主体化(2)

コラム 3 二段活用の語幹は xxx;u- か, xxx;ur- か

二段活用の動詞にはたとえば「開くる akuru」という他動詞がある（意味は「開ける」。室町時代の終止形）。これは「開く ak-」という自動詞に許容態形式が後接してできたものであるが、この形式を形態素分析しようとするとき、許容態の形式として -u- と -ur- のいずれを採用するかによって分析結果が異なることになる。連用形は ak;e-Øi, 命令形は ak;e-yo, 終止形は ak;Ø-u であって、これらの活用形には uru 部分がないので、ここで取り上げるのは連体形と已然形となる。

① -u- と考えると [連体] ak;u-ru [已然] ak;u-re となり、

② -ur- と考えると [連体] ak;ur-u [已然] ak;ur-e となる。

どちらの可能性もあるが、本書では ② の -ur- を採っている。それは、日本語の態を表す形式は「母音+子音」の2音素でできているからである。-ar- がそうであり、-as- がそうである。二段活用の許容態連用形は -e- ないし -i- の1音素で、2音素ではないではないかとの反論があるかもしれないが、これは -ay- (-öy-, -uy-) という2音素の許容態の連用形 -ay-i (-öy-i, -uy-i) が変音したものであり (B7.1, B7.2), 許容態そのものは2音素なのである。また、別に、-rar-, -sas- という3音素の態形式があるではないか、との反論も考えられるが、これは態拡張した動詞の語幹が e や i の母音で終わるようになったので、これに -ar-, -as- を続ける際に母音連続回避のために子音を介入させたものである。介入子音音素は、補助的なものであるので、( ) 内に示すことになり、-(r)ar-, -(s)as- のように表記する。本来的な態形式はやはり -ar-, -as- の2音素から成るのである。また、-u 末語幹というものは日本語に存在しない。

このようなわけで、許容態形態素は1音素の -u- ではなく、2音素から成る -ur- であると、本書では考えている。

表 B8-13 態拡張の動詞別状況 (現代語)

拡張形式 原動詞		Z												T											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Zn	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Tn
		無変化	対他 -e-	対血 -e-	対血 -ar-	対血 -ar-e-	対他 -as-	対他 -as-e-	対血 -s-e-	対血 -as-	対血 -as-e-	対血 -ay-e-	対血 -e-	無変化	対他 -e-	対血 -e-	対他 -ar-	対他 -ar-e-	対他 -as-	対他 -as-e-	対血 -s-e-	対血 -as-	対血 -as-e-	対血 (a)y-e-	対血 -ar-
11	hur- 降る	○																							
12	uk- 浮く	○				○																			
13	ni- 似る	○						○																	
14	nak- 泣く	○										○													
15	ak-(1) 開く	○	●																						
16	dok- どく	○	●				●																		
17	tum- 詰む	○	●		○		●																		
18	karam- 絡む	○	●		○		●	●																	
19	mor- 漏る	○		●			●																		
20	mah- 舞う	○			○		●																		
21	ah- 合う	○						●																	
22	ugok- 動く	○					●																		
23	ir- 入る		●																						
24	hur- 触る		●	○			(○)																		
25	nob- 延ぶ		●	○i			●																		
26	tutah- 伝ふ		●		○																				
27	ak-(2) 明く			○																					
28	ok- 起く			○i	○o		●o																		
29	sak- 栄く				○							○													
30																									

注) ○は自動詞, ●は他動詞, ( ) は複合語関連.

表 B8-14 態態拡張の動詞別状況 (現代語)

拡張形式 原動詞		Z											T												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Zn	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Tn
		無変化	対他	対自	対自	対他	対他			対自	対他	対他		無変化	対他	対自	対他	対他	対他	対自	対自	対他	対他	対他	
51	ker- 蹴る													●											
52	kik- 聞く													●				●	●					○	
53	ki- 着る													●						●					
54	kudak- 砕く													●	○										
55	sir- 知る													●	○				●	●					
56	mi- 見る													●	○					●					
57	tok- 梳く													●	○						●				
58	nuk- 抜く													●	○		○				●				
59	husag- ふさぐ													●			○								
60	tukam- つかむ													●			○		●	●					
61	tunag- つなぐ													●			○								
62	nos- 載す															●									
63	tom- 止む															●		○							
64	wak- 分く															●		○							
65	sut- 捨つ															●			○						
66	sazuk- 授く															●		○							●
67																									
68																									
69																									
70																									

注) ○は自動詞, ●は他動詞, ( )は複合語関連.

表 B8-15 態態拡張方式一覧表

節	方式	態変化	態変化の内容	原自動詞拡張	原他動詞拡張	活用の変化
B9.1	[1]	無変化	原動詞のまま現代へ	[Z1] 自 〇 自	[T1] 他 〇 他	一段→一段 四段→五段
B9.2	[2]	態変換	許容態による態変換(自他逆転)	[Z2] 自 e 他	[T2] 他 e 自	四段→二段→一段
B9.3	[3]	態補強	許容態による態補強(自他保持)	[Z3] 自 e/i 自	[T3] 他 e/i 他	四段→二段→一段
B9.4	[4]	新自動詞形成(1)	-ar-による新自動詞形成	[Z4] 自 ar 自	[T4] 他 ar 自	四段→四段→五段
B9.5	[5]	新自動詞形成(2)	-ar-e-による新自動詞形成	[Z5] 自 are 自	[T5] 他 are 自	四段→二段→一段
B9.6	[6]	新他動詞形成(1)	-as-による新他動詞形成	[Z6] 自 as 他	[T6] 他 as 他	四段→四段→五段
B9.7	[7]	新他動詞形成(2)	-as-e-による新他動詞形成	[Z7] 自 ase 他	[T7] 他 ase 他	四段→二段→一段
B9.8	[8]	新他動詞形成(3)	-s-e-による新他動詞形成	[Z8] 自 se 他	[T8] 他 se 他	一段→二段→一段
B9.9	[9]	対自原因(1)	-as-による敬語動詞形成	[Z9] 自 as 自	[T9] 他 as 他	四段→四段→五段
B9.10	[10]	対自原因(2)	-as-e-による敬語動詞形成	[Z10] 自 ase 自	[T10] 他 ase 他	四段→二段
B9.11	[11]	新自動詞形成(3)	-ay-e-による新自動詞形成	[Z11] 自 aye 自	[T11] 他(a)ye自	四段→二段→一段
B9.12	[12]	非〇格客体主体化	ある態構造による新動詞形成	[Zn] 自〇自/他	[Tn] 他〇他/自	語により異なる

## B 9 章

### 動詞態拡張各方式

#### B9.0 態拡張の各方式

本章 B9.1～B9.12において態拡張のそれぞれの方式について論ずる。

方式 [1]～[12] の構造図表内の左側では原動詞が自動詞の、右側では原動詞が他動詞の態拡張を示している。自他両用の原動詞は左右両方に属することになる。表中のゆびさき文字部分は推定形式であることを示し、「前」は「前記録時代」を示している（他の記号の意味は B8.5 pp. 121-125 を参照）。

ここに本章の内容を表にして示しておく（表 B8-15も参照）。

表 B9-0 本章の内容

節	方式	態変化	原自動詞	原他動詞
B9.1	[1]	無変化	[Z1] 自 ∅ 自	[T1] 他 ∅ 他
B9.2	[2]	態変換	[Z2] 自 e 他	[T2] 他 e 自
B9.3	[3]	態補強	[Z3] 自 e/i 自	[T3] 他 e/i 他
B9.4	[4]	新自動詞形成(1)	[Z4] 自 ar 自	[T4] 他 ar 自
B9.5	[5]	新自動詞形成(2)	[Z5] 自 are 自	[T5] 他 are 自
B9.6	[6]	新他動詞形成(1)	[Z6] 自 as 他	[T6] 他 as 他
B9.7	[7]	新他動詞形成(2)	[Z7] 自 ase 他	[T7] 他 ase 他
B9.8	[8]	新他動詞形成(3)	[Z8] 自 se 他	[T8] 他 se 他
B9.9	[9]	対自原因(1)	[Z9] 自 as 自	[T9] 他 as 他
B9.10	[10]	対自原因(2)	[Z10] 自 ase 自	[T10] 他 ase 他
B9.11	[11]	新自動詞形成(3)	[Z11] 自 aye 自	[T11] 他(a)ye自
B9.12	[12]	非を格客体主体化	[Zn] 自○自/他	[Tn] 他○他/自

B9.1 方式 [1] 無変化

表 B9-1a 方式 [1] 構造図表

[Z1] 自 ∅ 自		[T1] 他 ∅ 他	
0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>	0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>
1		1	
2		2	
3	<p style="text-align: right;">(五段)</p>	3	<p style="text-align: right;">(五段)</p>

表 B9-1b 方式 [1] 形式表 (子音末)

		連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0	前	ugok-i	ugok-u	ugok-u	ugok-e	ugok-i-a
	奈	ugok-i	ugok-u	ugok-u	ugok-e	ugok-e
1						
2						
3	現	ugok-i	ugok-u	ugok-u	ugok-eba	ugok-e

表 B9-1c 方式 [1] 形式表 (母音 i 末)

		連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0	前	mi-∅i	mi-ru	mi-ru	mi-re	mi-∅i-yo
	奈	mi-∅i	mi-ru	mi-ru	mi-re	mi-yo
1						
2						
3	現	mi-∅i	mi-ru	mi-ru	mi-reba	mi-ro

## B9.1 ① 方式 [1] について

これは奈良時代に四段活用で、また少数ではあるが一段活用で、自動詞、他動詞であったものが、態拡張せずにそのまま今日も自動詞、他動詞として使用されているものである。態拡張しないというのも、態拡張のシステム全体からみると、態拡張の1つのあり方である。

## B9.1 ② [Z1] 原自動詞のまま現代語へ

「動く ugok-」という動詞は態拡張しなかったために現代語でも自動詞である。このような自動詞を [Z1] とする。

表 B9-1d [Z1] の無変化のまま現代語になった原自動詞例

## [子音末動詞]

開く ak-	遊ぶ asob-	動く ugok-	勝つ kat-
帰る kaher-	咲く sak-	去る sar-	住む sum-
飛ぶ tob-	泣く nak-	成る nar-	乗る nor-
降る hur-	行く yuk-/ik-		

## [母音 i 末動詞]

似る ni-	居る wi-
--------	--------

「居る wi-」は原動詞として扱うが、「居 w-」から生じている可能性があり、更に検討が必要である (p.147 コラム 4 参照)。

「ある ar-」という動詞は奈良期の終止形が ar-i であり、ar-u ではないので、[Z1] に「準じたもの」とする (B7.7 鎌倉(4), B8.4iv) ラ変動詞 参照)。

## B9.1 ③ [T1] 原他動詞のまま現代語へ

[T1] の構造図表での例「砕く kudak-」は態拡張せずに他動詞のまま現代語に至っている。ただし、同じ kudak- でも [T2] (B9.2) では態拡張して自動詞 (kudak:e-) となっている。

表 B9-1e [T1] の無変化のまま現代語になった原他動詞例

[子音末動詞]			
打つ ut-	置く ok-	押す os-	書く kak-
買ふ kah-	聞く kik-	砕く kudak-	敷く sik-
畳む tatam-	継ぐ tug-	積む tum-	摘む tum-
取る tor-	飲む nom-	拾ふ hiroh-	読む yom-
折る wor-			
[母音 i 末動詞]			
射る i-	着る ki-	煮る ni-	見る mi-

## B9.1 ④ [Z1] [T1] の自他共通原動詞

「増す mas-」は現代語に至っても「水かさが増す」「水かさを増す」のように自動詞、他動詞としての性質を保っている (B8.3 ⑥ 参照)。このような動詞は [Z1] としての扱いと [T1] としての扱いができる。このような原動詞の例として次のようなものがある。

表 B9-1f [Z1] [T1] の自他共通原動詞例

絡む karam-	注ぐ sosok(g) -	積む tum-	開く hirak-
吹く huk-	増す mas-	笑ふ warah-	

## B9.1 ⑤ 四段活用の五段活用化とその実質

子音幹動詞 (語幹が子音で終わる動詞) は古語では四段活用していたが、現代語では五段活用するようになった。……このように表現するともものしい感じになり、何か変化があったような印象になるが、実質としては語幹そのものが変化しているわけではない。語幹に付加される形式として「オ」で始まる描写詞 -oo が発生しただけのことである。つまり、「四段活用の五段活用化」という表現には、ほとんど実質的な意味がないのであって、ひらがなで文法を扱っていたために過剰な表現となったのである。子音幹動詞につくオで始まる描

写詞が1つでただけのことなのである。

このことをわかりやすく示すために表 B9-1g を作成した。

表 B9-1g 四段活用の五段活用化 -oo の発生

段	活用形	古語	現代語
ア段	未然形	asob- <u>azu</u>	asob- <u>ana.k-i</u>
イ段	連用形	asob- <u>i</u>	asob- <u>i</u>
ウ段	終止形	asob- <u>u</u>	asob- <u>u</u>
	連体形	asob- <u>u</u> 子ども	asob- <u>u</u> 子ども
エ段	已然・仮定形	asob- <u>e</u>	asob- <u>eba</u>
	命令形	asob- <u>e</u>	asob- <u>e</u>
オ段	未然形 2		asob- <u>oo</u>

(ただ -oo が増えただけ)

なお、この -oo は、古語の推量・意志の助動詞 -am-u が次のように音転してできたものである。

-am-u → -am → -an → -au → -oo

ちなみに、参考までに、一段活用・母音幹 (-i) 動詞の活用表も掲げておく。

表 B9-1h 一段活用と-yoo の発生 (y は介入子音)

段	活用形	古語	現代語
イ段	未然形	m <sub>i</sub> -zu	m <sub>i</sub> -na.k-i
イ段	連用形	m <sub>i</sub> -Øi	m <sub>i</sub> -Øi
イ段	終止形	m <sub>i</sub> -ru	m <sub>i</sub> -ru
	連体形	m <sub>i</sub> -ru子ども	m <sub>i</sub> -ru子ども
イ段	已然・仮定形	m <sub>i</sub> -re	m <sub>i</sub> -reba
	命令形	m <sub>i</sub> -yo	m <sub>i</sub> -ro
イ段	未然形 2		m <sub>i</sub> -yoo

五段活用の表(表 B9-1g)とアンダーライン部を比べると、改めて不合理さに気付かされる。活用名の根拠となっている母音は、一方は語幹の外にあり、一方は語幹末にある。

B9.2 方式 [2] 態変換 -e- による態変換

表 B9-2a 方式 [2] 構造図表

[Z2] 自 e 他		[T2] 他 e 自	
0	<p>(四段)</p>	0	<p>(四段)</p>
1		1	
2	<p>(下二) -e- -Ø-, -ur-</p>	2	<p>(下二) -Ø-, -ur-</p>
3	<p>(下一)</p>	3	<p>(下一)</p>

表 B9-2b 方式 [2] 形式表

		連用	終止	連体	已然 (假定)	命令
0	前	ak-i	ak-u	ak-u	ak-e	ak-i-a
1						
2	前	ak;ë-Øi	ak-u	ak-u	ak-e	ak;ë-Øi-yo
	奈	ak;ë-Øi	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yo
	室	ak;e-Øi	ak;ur-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;e-yo
3	江	ak;e-Øi	ak;e-ru	ak;e-ru	ak;e-reba	ak;e-ro

## B9.2① 方式 [2] について

許容態 (-e- 等) が対他許容として働き、態変換が行われる。つまり、自動詞が他動詞に、他動詞が自動詞になる。/2/ では江戸前期まで -e- (-i-) が連用・未然・命令語幹を形成し、-ur- が連体・終止・仮定語幹を形成していた(ただし、鎌倉までは -ur- ではなく、-Ø- が終止語幹を形成していた)。このことを表の形で示せば表 B9-2b のようになる。

## B9.2② [Z2] 態変換 原自動詞が -e- により他動詞へ

構造図表では自動詞の「開く ak-」を詞例としている。これが許容態 -e- による態拡張を受け他動詞「開ける ak:e-」となった(B3.1参照)。

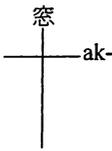


図 B9-1 窓があく

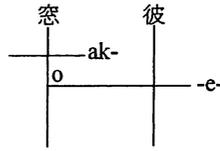


図 B9-2 彼が窓をあける

図 B9-1 では「窓」という実体(名詞)が ak- という属性と結びついている。図 B9-2 では「彼」が「窓」と属性 ak- との結合を「許容する」形になっており、「彼」による他動の意味が形成されている。動詞に着目すれば、自動詞 ak- が他動詞 ak:e- に変換されたことになる。

表 B9-2c [Z2] の -e- (-ur-) によって態変換する原自動詞例

開く ak-	赤む akam-	生く ik-	痛む itam-
入る ir-	浮かぶ ukab-	浮く uk-	震む kasum-
絡む karam-	沈む sidum-	育つ sodat-	添ふ soh-
染む som-	立つ tat-	垂る tar-	撓む tawam-
付く tuk-	伝ふ tutah-	続く tuduk-	詰む tum-
整ふ totonoh-	並ぶ narab-	伸ぶ nob-	伏す hus-
触る hur-	満つ mit-	向く muk-	休む yasum-
止む yam-	歪む yugam-	寄す yos-	

「生く ik-、伸ぶ nob-、満つ mit-」は [Z3] の「上二段活用」も参照。

「生く ik-」の許容態形式(生け ik:e-)の意味は『小学館古語大辞典』によれば、①「生かす、生存させる」、②「(枯らさないようにする意から)花などを、水を入れた器にさす」、③「(長く保たせる意から)野菜や炭火を、土や灰にうずめる」である。

「浮く uk-」の許容態形式(浮け uk:e-)は現代語にはなくなっているが、明治・大正期までは詩文に使用されることがあった。

「<sup>あ</sup>嗚呼玉杯に花浮けて uk:e-Ø=te-Ø」(図 B9-3)

という「一高寮歌」(1902)の有名な歌詞は、後藤・渡部(1993:38)によれば、矢野勘治が「玉の杯 花浮か<sup>さかす</sup>べ/緑の酒に月宿し」と作詞したものを、楠正一が作曲に際して軟弱であるとし、「嗚呼玉杯に花<sup>う</sup>けて/緑酒に月の影やどし」と改めたものであるという。「浮かべ」が「うけて」に変えられたわけである。ひらがなで書かれてはいるが、意味の上から考えれば、この「うけて」は「浮けて」のはずである。

「浮けて」には、ほかにも、次のような例がある。

「桜の花<sup>う</sup>けて 流れたゆまず海に行く」(鹿児島県阿久根小学校校歌)

<http://www.city.akune.kagoshima.jp/sisetu/asyo.html#3> (2009年8月確認)

「さ霧に暮るる鴨の水 さす夕月の影<sup>う</sup>けて」(図 B9-4)(京都薬科大学校歌)

<http://www.kyoto-phu.ac.jp/gaiyo/kousyo/index.html> (2009年8月確認)

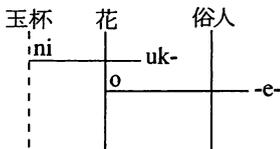


図 B9-3 玉杯に花を浮ける



図 B9-4 鴨の水が月影を浮ける

「絡む karam-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥)である([Z4][T4]参照)。

「垂る tar-」はここでは態変換している。態補強もある([Z3]参照)。

「伏す hus-」は、原自動詞で態変換するのであるが、「臥す hus-」の場合は

原自動詞でありながら態補強し、「臥せる hus:e-」でも自動詞である〔Z3〕。

「触る hur-」は、「磯に触り hur-i (海岸に沿って) (万葉4328)」(図 B9-5) のように ni 格の実体を必要とする。この動詞に他对の -e- が付いて態拡張すると hur:e-となる。

B9-21) (彼  $\emptyset$ <sub>i</sub>) 作品に手を触れる。对他 hur:e- (図 B9-6)



図 B9-5 磯に触る

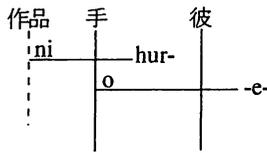


図 B9-6 手を触れる

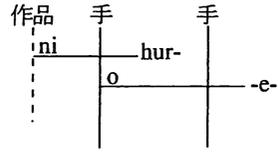


図 B9-7 手が触れる [Z3]

次のような場合は -e- が対自として働くので, [Z3] となる。

B9-22) 作品に手が触れる。対自 hur:e- (図 B9-7)

「言いふらす」の「触らす」は [Z6] を参照。

「詰む tum-」に関しては [Z4] を参照。

「寄す yos-」は自他共通原動詞である。[T2] を参照。

「泣く nak-」も「泣ける nak:e-」という形をもつが, これは [Z2] の構造ではなく, [Zn] の構造をしている (B9.12①参照)。

### B9.2③ [T2] 態変換 原他動詞が -e- により自動詞へ

[T2] では「砕く kudak-」という詞を構造図表中に例示している。「砕く」は古語において「自動詞・下二段活用」([T2])と「他動詞・四段活用」([T1])の2種類がある。表中例は「自動詞・下二段活用」の kudak-で, これは「他動詞・四段活用」を原動詞としている。「波が岩に砕ける kudak:e-」という場合の構造は図 B9-8 のようになっている。

「岩が波を砕く」ことを「波」が許容することになり, 動詞としては, 「砕く kudak-」という他動詞が「砕ける kudak:e-」という自動詞になって態変換が生じたことになる。

客体 B (波) は A (岩) の実現する作用 (kudak-) を許容するものである。



B9.2④ [T2] 「見える」の尊敬用法 (おいでになる)

次のような「見える mi:e-」は敬語で、「おいでになる」の意味になる。

B9-23) 林さんが見えた (林さんがおいでになった) (図 B9-11)

この文は「林さん」が会場などに到着したことを表現しており、構造は「私が林さんを見る」ことを「林さん」が許容することを示している。「林さん」は意志をもってその場に現れたと考えられ、「許容」に「林さん」の意志を見い出すことができる。つまり、2交 (B1.3参照) は有意である。

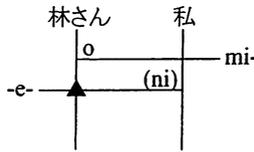


図 B9-11 林さんが見え(た)

注) 図中の▲は有意有制を表す(B1.5参照)。

これが、「見える」の尊敬用法であるが、「見える」には「可能」の意味もある。[T2] の可能用法について次の⑤で触れておきたい。

B9.2⑤ [T2] 「可能動詞」

室町時代には「読める yom-e-」(下二段活用) で可能を表すようになり、可能動詞が生み出されるようになった。これは [T2] の1交が「行為(有意志)」として使用されるようになったことを示している (B3.3 参照)。

B9-24) 林さんが見える。(図 B9-12)

という文で、「見える」が「可能」を表しているとき、1主である「私」には「見る」意志がある。この場合、「見る」ことの実現が制御可能のとき (▲) は「意図どおりの可能」となる。制御不可能 (△) のときは「幸運な可能」となる。

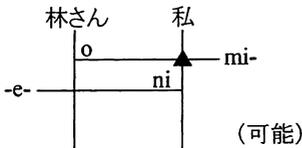


図 B9-12 (私には)林さんが見える(る)

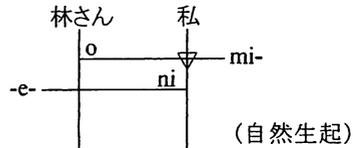


図 B9-13 (私には)林さんが見え(る)

ちなみに、「私」に「見る」意志が特がない場合 (▼▽) (図 B9-13) は、「見える」は「自然生起」を表現する (詳しくは B3.3 参照).

「可能」「自然生起」の場合は ni 格は表層化されることがあり,

B9-25) 私には林さんが見える／見えない.

のようになることがある.

また、「目が見える／耳が聞こえる」では、「目／耳」は動詞「見る／聞く」の o 格になく, de 格にある. この場合は [T2] ではなく [Tn] での扱いとなる (B9.12 ③ b)).

なお、「可能動詞」と呼ばれるが, これは新しい語幹が形成されるようになったと考えるよりは -e- が「非新動詞形成態」(B8.2 ②) となったことを意味していると考えた方がよい. [T1] 等にも広汎に適用できるからである. 「可能動詞」としての新動詞が発生したものとしては扱わないことにする.

また, 「書く kak-」のような子音幹動詞や, 「建てる tat:e-」「起きる ok:i-」のような態拡張により生成された母音幹動詞の場合には「可能」を表すために基である -(r)ar-e- (助動詞 ル, ラル) という形式を使用するが (書ける kak-ar:e- 後に kak-~~ar~~:e-, 建てられる tat:e-rar-e-, 起きられる ok:i-rar-e-), この形式については本書 p. 165 のコラム 5 を参照. 『文法』(12.5 3)) の受動基 B も参照されたい.

他動詞を可能動詞として使用する場合には [T3] の形式もあるので B9.3 ⑥ も参照されたい.

### B9.2 ⑥ 自動詞からの「可能動詞」

自動詞でも可能動詞としての使用について考える必要があるが, これは [Z3] において扱っている (B9.3 ⑥).

## コラム 4 「居る wi-」は原動詞か

奈良時代に「居る/ゐる wi-」という動詞があった。これは現代語の「居る/いる i-」につながる動詞であるが、これが奈良時代において原動詞であったかどうかについて考えなければならない (B8.3⑦)。

この動詞は、意味は「立つ」の反対で、「立っているものや動いているものが、ある所に座ったりとまったりする」ことを表していた。

奈良時代においては上二段活用であったので動詞語幹は wi- であったが、それ以前の活用としては、終止形に「う w-u」が認められている。それで、以前は上二段活用動詞であったものが上二段活用化したのであろうと推測されている (『岩波古語辞典』「ゐ」など)。この推測に基づけば、次表のような変遷を推定することになる (ただし、-ur- の存在は不明)。

表 Bコ4 動詞「ゐる wi-」の変遷推定表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記 1	w-i	w-u	w-u	w-e	w-i-yō
前記 2	w;i-∅i	w-u	w-u	w-e	w;i-∅i-yō
前記 3	w;i-∅i	w-u	w;ur-u	w;ur-e	w;i-yō
前記 4	w;i-∅i	w;∅-u	w;ur-u	w;ur-e	w;i-yō
奈良	w;i-∅i	w;i-ru	w;i-ru	w;i-re	w;i-yō

この推定表では、終止形が許容態 ;ur- 形式の段階 (通常は鎌倉・室町) を飛び越えて一気に ;i- 形式を取っている (通常は江戸)。それで思い起こされるのは「蹴る」である。「蹴る kuw;e-」(表 B8-2) では奈良時代が上表の前記 4 の段階に当たり、平安時代が上表の奈良の段階に当たる。両者に共通するのは終止形に ;ur- の段階がないということである。これが前記録時代～平安時代の二段活用一段化の特徴であるといえる。原動詞は、w- であり、kuw- であるわけである。

同様のことは「ふ (干・乾・噺) h-u」という上二段活用動詞が一段化してできたといわれる「ひ (干・乾・噺) h;i-」についても言える。

B9.3 方式 [3] 態補強 -e- / -i- による態補強

表 B9-3a 方式 [3] 構造図表

[Z3] 自 e/i 自		[T3] 他 e/i 他	
0	<p>(四段)</p>	0	<p>(四段)</p>
1		1	
2	<p>(二段)</p>	2	<p>(二段)</p>
3	<p>(一段)</p>	3	<p>(一段)</p>

表 B9-3b 方式 [3] 形式表

		連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0	前	mor-i	mor-u	mor-u	mor-e	mor-i-a
1						
2	前	mor;ë-Øi	mor-u	mor-u	mor-e	mor;ë-Øi-yo
	奈	mor;ë-Øi	mor;Ø-u	mor;ur-u	mor;ur-e	mor;ë-yo
	室	mor;e-Øi	mor;ur-u	mor;ur-u	mor;ur-e	mor;e-yo
3	江	mor;e-Øi	mor;e-ru	mor;e-ru	mor;e-reba	mor;e-ro

## B9.3① 方式 [3] について

ここでは許容態が態補強を行っている。態補強では許容態は「対自許容」(Aと属性の結合をA自身が許容する)として機能するので、許容態形式  $-e-$  /  $-i-$  ( $-\emptyset-$ ,  $-ur-$ ) が付加されても態関係は変化しない。この態補強により、自動詞は自動詞として、他動詞は他動詞として、形式的に、より明確に感じられるようになる (B3.4参照)。

奈良・平安期 (場合によっては中世以降も) において、「明け  $ak:e-$ 」のように態補強された形式が、態補強される以前の形式 (「明く  $ak-$ 」) と併存している動詞もある。そのような動詞は以下の該当語リストでは「#明く  $ak-$ 」のように「#」記号を付記することにする。これらの動詞は、古語辞典において四段活用と二段活用の両方の記述がある。

なお、「手紙が書ける  $kak-e-$ 」のような可能表現が「手紙を書ける」のように「手紙」を  $o$  格 で表すこともできるようになった変化については B9.3⑥で触れる。構造的には「態変換」から「態補強」に変化したことになる。

## B9.3② [Z3] 自動詞のまま態補強して四段から二段へ

## [下二段活用]

詞例としては「漏る  $mor-$ 」(四段動詞) を構造図表中に挙げてある。これは許容態の態補強を受けて「漏れる  $mor:e-$ ,  $mor;\emptyset-$ ,  $mor;ur-$ 」(下二段動詞) となった。自動詞のままである。

『小学館古語大辞典』「もる (漏る・洩る)」の項には、まず  $\square$  (自ラ四) の意味の記述があり、その後に  $\square$  (自ラ下二) の記述があり、「 $\square$  に同じ。」となっている。さらに「語誌」には「 $\square$  は、 $\square$  に比べてかなり遅れて現れ、」とある。

この記述における  $\square$  は「 $mor-$ 」のことであり、 $\square$  は「 $mor:e-$ 」のことであるのだから、この対自の  $-e-$  ( $-ur-$ ) は態補強をするだけで意味を変更していないことが分かる。

つまり、「水が漏る ( $mor-$ )」(図 B9-14) ことを「水」自身が許容する (対自許容) 形で態補強を行い、意味を変えずに「水が漏れる ( $mor:e-$ )」(図 B9-15) を生じている。

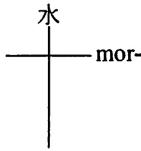


図 B9-14 水ノ漏る

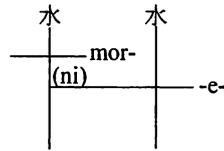


図 B9-15 水ノ漏れる

表 B9-3c [Z3] の -e- (-ur-) によって態補強する原自動詞例

# 明く ak-	溢る abur-	荒る ar-	出づ id-
癒ゆ iy-	# 恐る osor-	# 隠る kakur-	枯る kar-
消ゆ kiy-	暮る kur-	焦ぐ kog-	肥ゆ koy-
冷む sam-	# 逸る sor-	絶ゆ tay-	# 垂る tar-
勤む tutom-	流る nagar-	逃ぐ nig-	寝 n-
馳す has-	果つ hat-	撥ぬ han-	映ゆ hay-
晴る har-	経 h-	更く huk-	# 臥す hus-
# 触る hur-	負く mak-	漏る mor-	

「出づ id-」のようにすでに四段活用を失っているものも多い(表中「#」記号なし)。その場合の原動詞は「推定上の原動詞」(B8.3④)ということになる。

「出づ id;e-, id;Ø-, id;ur-」の「出で id;e-」形式は万葉集から詞頭の i を消失する傾向があり、室町時代にはほぼ消失し、後に一段化とともに「出る d;e-」になった(『日本国語大辞典』『日本語文法大辞典』)。

「逸る sor-」は四段活用もある([Z1])。

「垂る tar-」は態拡張の場合もある([Z2] 参照)。

「馳す has-」「撥ぬ han-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥) ([T3] 参照)。

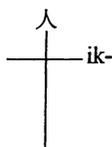
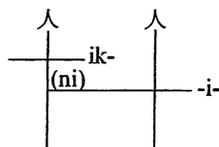
「振る hur-」は [Z2] 参照。

#### [上二段活用]

態補強には許容態 -i- によるものもある。その例として「生く ik-」を挙げておく。四段動詞の「生く ik-」が -i- による態補強を受けて上二段動詞「生く ik;i-, ik;Ø-, ik;ur-」となった。

同辞典「いく(生く)」の項には   (自カ四) の意味の記述があり、その後

の  $\square$  (自カ上二) には「《中世以後四段活用から転じた》」, 「 $\square$  に同じ。」とある。ここからこの対自の  $-i-$  ( $-ur-$ ) も態補強をするだけで意味を変更していないことが分かる。 $\square$  は「 $ik-$ 」(図 B9-16) であり,  $\square$  は「 $ik:i-$ 」(図 B9-17) である。

図 B9-16 人<sub>0</sub>生く図 B9-17 人<sub>0</sub>生きる

(同辞典には  $\square$  (他カ下二) の記載もあるが, この場合は  $-e-$  による対他許容での使用「生ける  $ik:e-$ 」であり, [Z2] に収められる。B9.2②)

表 B9-3d [Z3] の  $-i-$  ( $-ur-$ ) によって態補強する原自動詞例

荒ぶ arab-,	# 生く ik-,	起く ok-,	落つ ot-,
生ふ oh-,	老ゆ oy-,	下る or-,	# 借る kar-,
朽つ kut-,	悔ゆ kuy-,	懲る kor-,	過ぐ sug-,
# 足る tar-,	尽く tuk-,	閉づ tod-,	伸ぶ nob-,
恥づ had-,	# 潰つ hit-,	干 h-,	# 綻ぶ hokorob-,
滅ぶ horob-,	# 満つ mit-,	# 紅葉つ momit-	

「閉づ tod-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥) である ([T3] 参照)。

「伸ぶ nob-, 満つ mit-」は [Z2] も参照。

許容態表示が  $-e-$  になるか  $-i-$  になるかについては, B7.3 第 2 期イ・ウ参照。

「悲しぶ kanasib-, 忍ぶ sinob-, 荒ぶ susab-, 貴ぶ tahutob-, 学ぶ manab-, 喜ぶ yorokob-」のような  $b-$  形の動詞は, 上二段活用が先で, あとから四段活用になったようであるという (山口 1985: 358-360)。このことについては今後の解明にまつ。「運ぶ hakob-」はもともと四段動詞であった。上二段活用をしていた「綻ぶ hokorob-, 滅ぶ horob-」は現代語では上一段活用になっている。

サ変動詞のうち、「いいにおいがする。」のような「する」は自動詞であるので [Z3] として扱う。

### B9.3 ③ 変格活用における態補強 [Z3]

「死ぬ」(ナ変動詞)

「死ぬ sin-」はナ変動詞である。これについては B8.4 i) ナ変動詞を参照されたい。変化は表 B9-3e のとおり。

表 B9-3e 「死ぬ」(ナ変動詞) の変化

	連用形	終止形	連体形	已然形(仮定型)	命令形
前記録時	sin-i	sin-u	sin-u	sin-e	sin-i-a
奈良	sin-i	sin;∅-u	sin; <u>ur</u> -u	sin; <u>ur</u> -e	sin-e
室町	sin-i	sin; <u>ur</u> -u	sin; <u>ur</u> -u	sin; <u>ur</u> -e	sin-e
江戸	sin-i	sin-u	sin-u	sin-eba	sin-e

助動詞「ぬ」についても B8.4 i) ナ変動詞を参照。変化は表 B9-3f 参照。

表 B9-3f 助動詞「ぬ」の変化

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	=n-i	=n;∅-u	=n; <u>ur</u> -u	=n; <u>ur</u> -e	(=n-e)
室町	ナシ	=n;∅-u	=n; <u>ur</u> -u	=n; <u>ur</u> -e	ナシ
江戸	消滅(「た」が発生し、これに代わる。)				

「来る」(カ変動詞)

カ変動詞の「来る k-」については B8.4 iii) カ変動詞 を参照されたい。変化は表 B9-3g 参照。

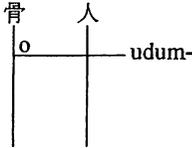
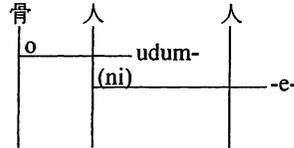
表 B9-3g 「来る」(カ変動詞) の変化

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形(仮定型)	命令形
前記録	k-ōzu	k-ī	k-u	k-u	k-e	k-ō
奈良	k-ōzu	k-ī	k;∅-u	k; <u>ur</u> -u	k; <u>ur</u> -e	k-ō
室町	k-ōzu	k-i	k; <u>ur</u> -u	k; <u>ur</u> -u	k; <u>ur</u> -e	k-oi
江戸	k-ona(k)-i	k-i	k; <u>ur</u> -u	k; <u>ur</u> -u	k; <u>ur</u> -eba	k-oi

## B9.3④ [T3] 他動詞のまま態補強して四段から二段へ

## [下二段活用]

[T3] の構造図表中には「上ぐ ag-」を例示してある。ただ、この「上ぐ」を始めとして、奈良時代には四段活用をする原他動詞が失われている例が多い (B8.3④「推定上の原動詞」参照)。ここでは室町時代に態補強の行われた「埋む udum-」(図 B9-18) を例として説明したい。この他動詞に同一の実体(名詞)を主体とする許容態の -e- (室町時代には -ë- ではない。)が付いて、対自許容の形で新たな他動詞「埋め udum;e-」が形成される(図 B9-19) のであるが、これは基本的意味を変更せずに、他動詞が他動詞であることをより明確にする結果を導いたのである。つまり態補強である。

図 B9-18 人<sub>1</sub>骨を埋む図 B9-19 人<sub>1</sub>骨を埋め

『小学館古語大辞典』「うづむ(埋む)」の項には、まず  $\square$  (他マ四) として四段活用動詞 (udum-) としての意味の記述があり、その後  $\square$  (他マ下二) として二段活用動詞 (udum;e-) としての意味の記述がある。 $\square$  の意味は「うめる。うずめる。」とあり、これは  $\square$  の①の意味記述と同じである。

また、『角川古語大辞典』には「室町時代ごろから下二段活用の例が見える。」とあり、四段活用が先に存在していたことを知ることができる。

「受く uk-」という原動詞は「意味により拡張方式が異なる原動詞」(B8.3⑤) である。[T3] としての「受く uk-」は「試験を受ける uk;e-」のような「人が行うこと、さずけることなどに応じる」意味において使用されている。B9.4③も参照。

「離く sak-」という原動詞は「難問を避ける sak;e-」のような形で使用され、また「遠ざける too=sak;e-」のような形の中にもある。

表 B9-3h [T3] の -e- (-ur-) によって態補強する原動詞例

上ぐ ag-	預く aduk-	植う uw-	受く uk-
棄つ ut-	#埋む udum-	埋む um-	憂ふ ureh-
#掠む kasum-	替ふ kah-	加ふ kuhah-	#包む kurum-
超ゆ koy-	#離く sak-	下ぐ sag-	授く saduk-
鎮む sidum-	捨つ sut-	据う suw-	束ぬ tukan-
告ぐ tug-	繋ぐ tunag-	#説く tok-	遂ぐ tog-
止む tom-	#挟む hasam-	馳す has-	撥ぬ han-
#含む hukum-	#任く mak-	曲ぐ mag-	愛づ med-
求む motom-	茹づ yud-	#分く wak-	#忘る wasur-

「授く saduk-」は ni 格実体を伴い、図 B9-20 のような構造をしている。ni 格実体「夫婦」が -ar- の主体となる場合（図 B9-21）があるが、これについては [Tn] (B9.12③) を参照。「預く aduk-」もこのタイプである。

「繋ぐ tunag-」は [T4] もある。

「馳す has-」は「自他共通動詞」である ([Z3] 参照)。

「分く wak-」は「意味により拡張方式が異なる原動詞」(B8.3⑤) であり、「別々にする。区別する。」の意味においてここでの態補強がなされる。「理解する・識別する」の意味では [T4] である (B9.4③)。

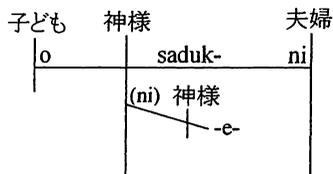


図 B9-20 神様が夫婦に子どもを授ける 図 B9-21 夫婦が子どもを授かる [Zn]

「忘る wasur-」には忘れようとする意志があり、「忘れる wasur;e-」にはその意志がなく自然に忘れる意味合いが強い、と言われている（たとえば『日本語文法大辞典』）。構造として見れば、「忘れる wasur;e-」には対自許容態 -e- が加わっており、形式的には「忘る」ことを自分が許容することになっている。

現代語では歌詞の中などで否定の形で「忘れられぬ wasur-ar-e-nu」「忘れられぬ wasur;e-rar-e-nu」のように、許容態のないものも、許容態のあるものも使用されている。ただ現代口語では、「忘れられない wasur-ar-e-na. [k-i]」よりは許容態のある、したがって態補強のなされた「忘れられない wasur;e-rar-e-na. [k-i]」の方が自然に感じられる。

なお、「説く」という他動詞は tok-（四段活用）では「説明する」の意味であるが、tok;e-（下二段活用）では意味を保ちながら「お説きになる」のニュアンスで尊敬語化する（『小学館古語大辞典』）。ここでの許容態は、対自許容で単に態補強を行うだけでなく、尊敬の対象者が自らの行為を許容するというニュアンスを加えている。[T9] の -as- を参照されたい。

助動詞「つ」は表 B9-3i のような変化としてとらえられる。

表 B9-3i 助動詞「つ」の変化

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	=t;e-∅	=t;∅-u	=t;ur-u	=t;ur-e	=t;e-yo
鎌倉	=t;e-∅	=t;∅-u	=t;ur-u	=t;ur-e	ナシ
江戸	消滅（「た」が発生し、これに代わる。）				

助動詞「つ」は [T3] 動詞「棄つ ut-」の「棄 u」の部分が脱落したものと考えられている。「た」が発生したためにその役割を終え、江戸時代に消滅した。

連用形の =t;e-∅ は現代語の接続助詞「て」になっている (10.3, A4.5, A3章)。  
[上二段活用]

たとえば「帯ぶ ob-」という動詞は四段動詞の「帯ぶ ob-」が許容態 -i- による態補強を受けて上二段動詞「帯ぶ ob;i-, ob;∅-, ob;ur-」となった。『小学館古語大辞典』「お・ぶ（帯ぶ）」の項には「他バ四・他バ上二」とあり、「上代では四段活用，中古以降は上二段活用」とある。つまり、意味を変えずに許容態が加わったわけで、態補強がなされたわけである。

表 B9-3j [T3] の -i- (-ur-) によって態補強する原他動詞例

恨む uram-, # 帯ぶ ob-, 閉づ tod-, (借る kar-)

「閉づ tod-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥)である ([Z3] 参照)。

「借る kar-」は四段活用動詞であるが、『角川古語大辞典』には「近世後期の江戸語では上一段化した『かりる』も用いられている。」とあり、『岩波古語辞典』は「上一段に活用するのは、関東・東北地方の方言的な変化」としている。日本語態拡張として見ると、上二段活用を経ずにいきなり上一段活用として現れることになるようなので変則的であることになるが、これもこのような条件付きで [T3] に属するものとしておく。

### B9.3⑤ 変格活用における態補強 [T3]

「する」(サ変動詞)

サ変動詞の「する s-」については B8.4 ii) サ変動詞 を参照されたい。変化は表 B9-3k 参照。

表 B9-3k 「する」(サ変動詞) の変化

	(未然形)	連用形	終止形	連体形	已然形(假定形)	命令形
前記録1	sy-azu	sy-i	sy-u	sy-u	sy-e	sy-i-a
前記録2	s-ezu	s-i	s-u	s-u	s-e	s-e
奈良	s-ezu	s-i	s; <u>∅</u> -u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -e	s-e-yo
室町	s-ezu	s-i	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -e	s-e-yo
江戸	si-na(k)-i	s-i	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -u	s; <u>ur</u> -eba	si-ro

### B9.3⑥ 「可能動詞」としての使用 [Z3] [T3]

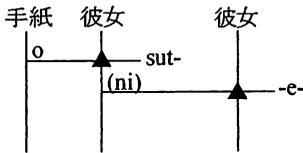
[T2] で述べた他動詞の可能動詞化は [T3] にもあり、また、自動詞では [Z3] の形式を取る。ただし、可能動詞は、ある動詞から可能を表す新動詞が形成されたものとは考えないので、態拡張動詞としては扱わない (B8.2②)。

可能動詞は下二段活用動詞に特有の形式ではない。子音幹動詞(五段活用動詞)にも、また態拡張により生じた母音幹動詞(一段活用動詞)にも無縁ではない。可能動詞の通時的発生に関しては本書 p.165 のコラム5を参照されたい。

他動詞の場合、たとえば「手紙が書ける kak-e-」のような可能表現は、元来方式 [2] (態変換) の形式をとるもので、-e- の主体「手紙」を主格にして描写したが、明治以降英語の影響等で「手紙を書ける」のように「手紙」を o 格で描写することもできるようになった。これについては構造的に2通りの

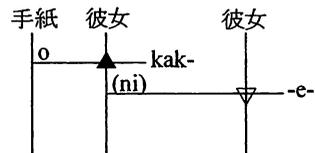
形式で考えることができ、[T2] の属性一体化による二重主語構造と考える場合と、[T3] の構造と考える場合がある (B9.2⑤, B3.3参照)。

[T3] の構造として考える場合は、態拡張の態補強との異同について考えておく必要がある。構造としては同一である。しかし、態補強と可能とは意志・制御のあり方が異なっている。態補強の場合は1交、2交とも同一の意志・制御のあり方になる (図 B9-22) が、可能の場合は1交 (動属性と主体) が有意 (▲△) で、2交 (-e- と主体) が無意無制 (▽) になる (図 B9-23)。



態補強

図 B9-22 彼女が手紙を sut;e-

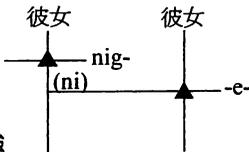


可能

図 B9-23 彼女が手紙を kak-e-

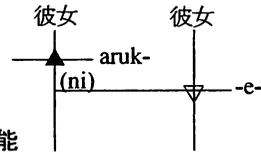
自動詞の場合、たとえば「歩く aruk-」の場合は -e- により可能動詞「歩ける aruk-e-」となる。自分が歩くことを自分が許容するという構造形式になり、ここから可能の意味が出てくる。

態補強と可能の異同については上記の他動詞の場合と同じことが言える。



態補強

図 B9-24 彼女が nig;e-



可能

図 B9-25 彼女が aruk-e-

9.4 方式 [4] 新自動詞形成(1) -ar- による新自動詞形成

表 B9-4a 方式 [4] 構造図表

[Z4] 自 ar 自		[T4] 他 ar 自	
0	<p>(四段)</p>	0	<p>(四段)</p>
1	<p>(四段)</p>	1	<p>(四段)</p>
2		2	
3	<p>(五段)</p>	3	<p>(五段)</p>

表 B9-4b 方式 [4] 形式表

		連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0	前	wak-				
1	奈	wak;ar-i	wak;ar-u	wak;ar-u	wak;ar-e	wak;ar-e
2						
3	現	wak;ar-i	wak;ar-u	wak;ar-u	wak;ar-eba	wak;ar-e

9.4① 方式 [4] について

[Z4] [T4] においては, -ar- が使用され, これが [Z] に対自で, [T] に対他で機能する。いずれも / 2 / の許容態を取らないので, 子音末動詞となり, 四段活用をする。V;ar- という形の新しい自動詞を作る。

## B9.4 ② [Z4] 原自動詞が -ar- により新自動詞へ

[Z4] の詞例として構造図表中に「舞ふ mah-」を挙げた。これに受影態 -ar- が関わることにより「廻る mah;ar-」になる。『岩波古語辞典』によれば「舞ふ mah-」と「廻る mah;ar-」は同根で、mah- は「平面上を旋回運動する意」であり、mah;ar- は「平面上を旋回する意」である。文法構造的には、ある主体が mah- 動きをする影響を同一主体が受けることを意味している（「まわす mah;as-」も同根であるが、これは [Z6] に属する）。

表 B9-4c [Z4] の -ar- によって新自動詞を形成する原自動詞例

絡む karam-	さく(栄) sak-	沈む sidum-	高む takam-
縮む tidim-	伝ふ tutah-	詰む tum-	深む hukam-
舞ふ mah-	休む yasum-		

「絡む karam-」は「自他共通原動詞」(B8.3⑥)である。[Z2] [T4] 参照。  
「詰む tum-」は特殊であり、/3/ が先で、/0/ が後で生じたようである（『角川古語辞典』「詰む」の項には、「詰む tum-」は、「詰まる」より後に生じた」とある）。このような現象についての検討が必要である。

表 B9-4d [Z4] -ar- の音転形 -or- によって新自動詞を形成する原自動詞例

籠む kom-	積む tum-	整ふ totonoh-
---------	---------	-------------

## B9.4 ③ [T4] 原他動詞が -ar- により新自動詞へ

[T4] の詞例として「分く wak-」を構造図表中に挙げた。これは「相違を見て明確に区別する意」を持つ（『岩波古語辞典』）。

「彼が理を分く wak-」という構造（図 B9-26）に -ar- が機能して、「理」が受身の主語のようになって「彼に理が分かる wak;ar-」（図 B9-27）という構造が生まれる。

また、「男が胸元を開く hadak-」からは「胸元が開かる hadak;ar-」（図 B9-28）が生まれ、「神様が夫婦に子どもを授く saduk-」からは「子どもが授かる saduk;ar-」（図 B9-29）が生まれる。

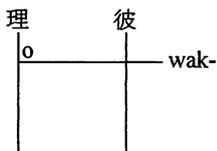


図 B9-26 彼が理を分く



図 B9-27 彼に理が分かる



図 B9-28 胸元がはだかる



図 B9-29 夫婦に子どもが授かる

「(大学に) 受かる uk;ar-」(図 B9-30) は「大学が彼を受く(受け入れる)」から、「彼がここに座る suw;ar-」(図 B9-31) は「(状況が) 彼をここに据う suw-」から生じる。



図 B9-30 彼が大学に受かる

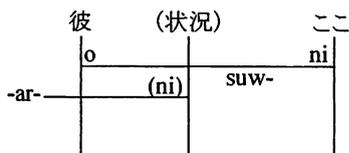


図 B9-31 彼がここに座る

表 B9-4e [T4] の -ar- によって新自動詞を形成する原他動詞例

上ぐ ag-	集む atum-	改む aratam-	受く uk-
埋む udum-	埋む um-	掛く kak-	重ぬ kasan-
絡む karam-	授く saduk-	捨つ sut-	据う suw-
繋ぐ tunag-	止む tom-	始む hazim-	開く hadak-
隔つ hedat-	茹ぶ yud-	分く wak-	

特殊と思われるもの (原他動詞の対自受影)

包む kurum-	摺む tukam-	跨ぐ matag-
-----------	-----------	-----------

「埋む udum-/um-」は B9.5 ③ 参照.

「絡む karam-」は「自他共通原動詞」である (B8.3 ⑥). [Z2] [Z4] 参照.

「捨つ sut-」の, ここ [T4] の「廃る sut;ar-」は現代語には伝わらず, [T5] の「廃れる sut;ar;e-」で今日に伝わっている.

「繋ぐ tunag-」は [T3] もある.

「分く wak-」は「分かる wak;ar-」(理解する)を形成する.

特殊と思われるもの(原他動詞の対自受影)

原他動詞の対自受影と考えられる珍しい例が3つある.「包む kurum-」は「幼児が毛布にくるまる」の場合は, 図 B9-32 のように対他受影であるが, 「彼が毛布にくるまる」の場合は, 図 B9-33 のように対自受影となる.

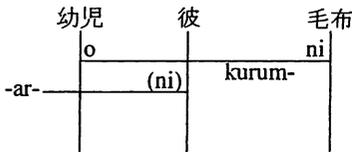


図 B9-32 幼児が毛布にくるまる(対他)

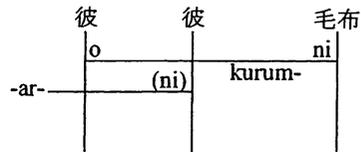


図 B9-33 彼が毛布にくるまる(対自)

「掴む tukam-」は「捕らえられる」の意味の「捕まる tukam;ar-」の場合は対他であるが, 「体を支えるために手で他のものを握る」の意味の「掴まる tukam;ar-」では対自受影と考えられる. 対象が二格であるのは自動詞「掴まる」となった結果「掴む tukam-」の他動性が失われ, 対象(馬を)が位置(馬に)と感じられるようになったからかもしれない(図 B9-34, B9-35). さらに検討を続けたい(「掴まふ tukam;ah;(e)-」の音転かもしれない).

「跨ぐ matag-」でも同様のことが言える(図 B9-34, B9-35)

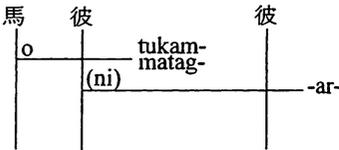


図 B9-34 \*馬をつかまる(対自)

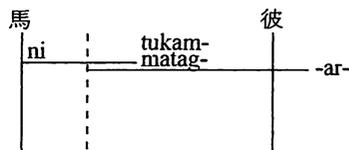


図 B9-35 馬につかまる(対自)

B9.5 方式 [5] 新自動詞形成(2) -ar-e- による新自動詞形成

表 B9-5a 方式 [5] 構造図表

[Z5] 自 are 自		[T5] 他 are 自	
0	<p>(四段)</p>	0	<p>(四段)</p>
1	<p>(ni)</p>	1	<p>(ni)</p>
2	<p>(ni) (ni) (下二)</p>	2	<p>(ni) (下二)</p>
3	<p>(下一)</p>	3	<p>(下一)</p>

表 B9-5b 方式 [5] 形式表

	連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0 前	sut-				
1 前	sut; ar-i	sut; ar-u	sut; ar-u	sut; ar-e	sut; ar-i-yo
前	sut; ar; ë-Øi	sut; ar; ar-u	sut; ar; ar-u	sut; ar; ar-e	sut; ar; ë-Øi-yo
2 奈	sut; ar; ë-Øi	sut; ar; Ø-u	sut; ar; ur-u	sut; ar; ur-e	sut; ar; ë-yo
室	sut; ar; e-Øi	sut; ar; ur-u	sut; ar; ur-u	sut; ar; ur-e	sut; ar; e-yo
3 現	sut; ar; e-Øi	sut; ar; e-ru	sut; ar; e-ru	sut; ar; e-reba	sut; ar; e-ro

## B9.5① 方式 [5] について

[Z5] [T5] においては, -ar- は [Z] に対自受影で, [T] に対他受影で機能する. この点 [Z4] [T4] と同様である. [Z5] [T5] では, これにさらに -e- (-Ø-, -ur-) が加わり, 両者に対自許容で機能する. 「V;ar;e-」という形の新しい自動詞が形成される.

## B9.5② [Z5] 原自動詞が -ar-e- により新自動詞へ

原動詞「浮く uk-」を [Z5] の詞例として構造図表に挙げた. これが [Z5] 方式で「浮かれる uk;ar;e-」という形に拡張した. 原動詞としての四段動詞「浮く uk-」の意味は「不安定な状態で, ただよう. 心理的に落ち着かぬさまにもいう」(『角川古語大辞典』)ということである. 主体 A がそのような不安定で落ち着かぬ状態にあることの影響を主体 A みずからが受けることを -ar- が表している. そして, この影響を受けることをみずから許容することを表すのが, それに続く許容態 (-e-, -Ø-, -ur-) である. 下二段動詞「浮かる uk;ar;e-, uk;ar;Ø-, uk;ar;ur-」の意味は「のほせて, ほうっとなる. 心がうつろになる」である.

つまり, 「浮かれる」は, みずから「浮く」状態になる影響をみずからが受け, それをみずからが許容するという構造をもっている. 現代語では「楽しくてじっとしてられない気持ちになる」という意味になっている(『現代新国語辞典』).

「逃れる nog;ar;e-」も [Z5] と考えられる. nog- は「逃ぐ nig-」の母音交替形である(『岩波古語辞典』参照).

表 B9-5c [Z5] の -ar-e- によって新自動詞を形成する原自動詞例

---

浮く uk-, 焦ぐ kog-, 尽く(疲) tuk-, 逃ぐ nig- (nog-)

---

## B9.5③ [T5] 原他動詞が -ar-e- により新自動詞へ

[T5] の詞例として他動原動詞「捨つ sut-」を構造図表に挙げた. これが「廢れる sut;ar;e-」という形式へと拡張した. ここには, たとえば「人々」

(A)があるもの(B)を「無用のものとして捨てる」ことの影響をそのあるもの(B)が受け、その影響を受けることをそのあるもの(B)自身が許容する、という構造がある。「廃れる」は、現代語では「〔世間に〕用いられなくなる。使われなくなる」(『現代新国語辞典』)という意味になっている。原動詞「棄つ sut-」が現代語で使用されることはないので、「廃れる」は受影態ではなく、自動詞とみなされる。

表 B9-5d [T5] の -ar-e- によって新自動詞を形成する原他動詞例

---

生む um-	埋む udum-	埋む um-	捨つ sut-
剥ぐ hag-	分く wak-		

---

「埋む udum-」「埋む um-」は -ar- が -or- に音転し、「埋もれる udum;or;e-」「埋もれる um;or;e-」となる。

「分く wak-」は「別れる wak;ar;e-」となる。

一方、「呼ぶ yob-」も同様に「呼ばれる yob-ar-e-」と拡張しているように見えるが、これは新動詞を形成しているわけではなく、受影態としての表現である。「呼ぶ yob-」という原動詞が現代語でも生きており、この動詞の表す出来事の影響を、一時的に A が受けるのである。「疑われる utagaw-ar-e-」「待たれる mat-ar-e-」「俵ばれる sinob-ar-e-」等も同様である。

コラム 5 受影基  $-(r)ar;e-$  と可能動詞 (下二活用助動詞ル・ラル)

受影基 (旧受動基)  $-(r)ar;e-$  は、原動詞であれ態拡張動詞であれ、動詞に外部から (A) 受動・自発, (B) 可能・尊敬の意味を付加する形式である。(A) では  $-e-$  が対自許容として機能し, (B) では  $-e-$  が対他許容として機能し, 両者とも  $-(r)ar;e-$  が一体化して 1 属性のようになる (『文法』12.5)。この受影基の変遷を表に示してみたい。未然形は語幹を示すだけなので、この表では省略する (B7.4 奈良(2))。

表 Bコ5 受影基 $-(r)ar;e-$ の変遷

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	$-(r)ay;e-\emptyset i$ $-ar;e-\emptyset i$	$-(r)ay;\emptyset-u$ $-ar;\emptyset-u$	$-(r)ay;ur-u$ $-ar;ur-u$	$-(r)ay;ur-e$ $-ar;ur-e$	- -
平安	$-(r)ar;e-\emptyset i$	$-(r)ar;\emptyset-u$	$-(r)ar;ur-u$	$-(r)ar;ur-e$	$-(r)ar;e-yo$ 尊
室町	$-(r)ar;e-\emptyset i$	$-(r)ar;ur-u$	$-(r)ar;ur-u$	$-(r)ar;ur-e$	$-(r)ar;e-yo$ 尊
江戸	$-(r)ar;e-\emptyset i$	$-(r)ar;e-ru$	$-(r)ar;e-ru$	$-(r)ar;e-re$	$-(r)ar;e-ro$ 受

現代語ではたとえば  $yom-$  という子音幹動詞は次のようになる。

$yom-ar;e-\emptyset i$ ,  $yom-ar;e-ru$ ,  $yom-ar;e-reba$ ,  $yom-ar;e-ro$

$mi-$  という母音幹動詞は子音  $r$  の介入があり、次のようになる。

$mi-rar;e-\emptyset i$ ,  $mi-rar;e-ru$ ,  $mi-rar;e-reba$ ,  $mi-rar;e-ro$

子音幹動詞の場合は「(B) 可能」の意味のとき、 $-ar-$  が省略されるのが普通である。これは許容態  $-e-$  /  $-ur-$  の許容機能のみでまかなうための省力で、室町時代末ごろから徐々に始まったようである (湯澤 1981: 227等)。

$yom-\text{æ};e-\emptyset i$ ,  $yom-\text{æ};ur-u$ ,  $yom-\text{æ};ur-e(\text{do})$  (室町時代)

$yom-\text{æ};e-\emptyset i$ ,  $yom-\text{æ};e-ru$ ,  $yom-\text{æ};e-reba$  (可能は命令形なし)

母音幹動詞の場合も「(B) 可能」の意味のときは  $-ar-$  が省略されることがあるが、このときは「ラ抜き」として非正規扱いになることが多い。

$mi-r\text{æ};e-$ ,  $mi-r\text{æ};e-ru$ ,  $mi-r\text{æ};e-reba$

コラム 1 (p. 32) も参照されたい。

B9.6 方式 [6] 新他動詞形成(1) -as- による新他動詞形成

表 B9-6a 方式 [6] 構造図表

[Z6] 自 as 他		[T6] 他 as 他	
0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>	0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>
1	<p style="text-align: right;">(四段)</p>	1	<p style="text-align: right;">(四段)</p>
2		2	
3	<p style="text-align: right;">(五段)</p>	3	<p style="text-align: right;">(五段)</p>

表 B9-6b 方式 [6] 形式表

	連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0 前	ugok-				
1 奈	ugok;as-i	ugok;as-u	ugok;as-u	ugok;as-e	ugok;as-e
2					
3 現	ugok;as-i	ugok;as-u	ugok;as-u	ugok;as-eba	ugok;as-e

B9.6① 方式 [6] について

原自動詞, 原他動詞に -as- が対他で機能して, V;as- という形式の新しい他動詞が形成される。

B9.6 ② [Z6] 原自動詞が -as- により新他動詞へ

「動く ugok-」を詞例として構造図表中に掲げてある。あるもの(C)が、あるもの(A)とその属性(ugok-)が結合することの原因者となっていることを -as- が表している。たとえば、

B9-61) 彼(C)が椅子(A)を動かす。ugok;as-

の文では、「彼(C)」が、「椅子(A)」とその属性「動く ugok-」の結合の原因者であることが -as- により示されている。構造は図 B9-36 のようになっている。

また、「消ゆ kiy-」の場合も、構造は同じである(図 B9-37)。

B9-62) 彼(C)が火(A)を消す。kiy;as-

しかし、kiy;as- の iy;a の部分が音韻融合により ë (甲類: B6.3 [前提2] [前提3]) になって、全体で kës- となった。

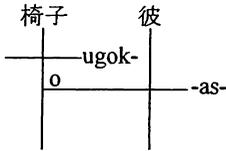


図 B9-36 彼が椅子を動かす

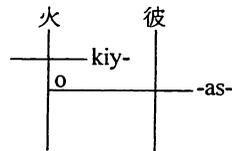


図 B9-37 彼が火を消す

表 B9-6c [Z6] の -as- で新他動詞を形成する原自動詞例

生く ik-	出づ id-	癒ゆ iy-	動く ugok-
驚く odorok-	乾く kawak-	消ゆ kiy-	朽つ kut-
暮る kur-	肥ゆ koy-	冷む sam-	覚む sam-
絶ゆ tay-	垂る tar-	散る tir-	尽く tuk-
費ゆ tuhiy-	飛ぶ tob-	鳴る nar-	慣る nar-
逃ぐ nig-	寝 n-	延ぶ nob-	励む hagem-
果つ hat-	生ゆ hay-	晴る har-	冷ゆ hiy-
更く huk-	触る hur-	負く mak-	舞ふ mah-
満つ mit-	燃ゆ moy-	漏る mor-	沸く wak-

「出づ id-」の場合は id;as- になるが、鎌倉時代以降、詞頭の i を消失して「出す d;as-」となった。

「寝 n-」は「寝す n;as-」となるが、[Z6] としては「寝かす、眠らせる」の意味になる。[Z9] では「おやすみになる」の敬語自動詞になる。

「触る hur-」は「言い触らす i-i=hur;as-」の中にあつて、[Z6] として機能している。構造は 図 B9-38 の通りである。「彼は、うわさを言つて、世間がうわさに触れるようにする」というのが構造意味である。

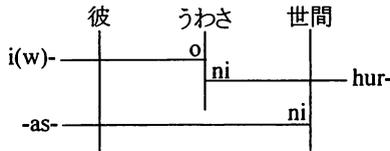


図 B9-38 彼が(世間に)うわさを言いふらす (i-i=hur;as-)

表 B9-6d [Z6] -as- の音転形 -os- で新他動詞を形成する原自動詞例

起く ok-	落つ ot-	及ぶ oyob-	下る or-
過ぐ sug-	退く nok-	干 h-	滅ぶ horob-

これらは「及ぶ、退く」を除き、[Z3] の態補強においては -e- ではなく -i- を取る (B6.3 [前提 3])。

表 B9-6e [Z6] -as- の音転形 -us- で新他動詞を形成する原自動詞例

過ぐ sug-	尽く tuk-
---------	---------

この両者は次のように二様の原因態表示をもち、また、[Z3] の態補強においては -e- ではなく -i- を取る (B6.3 [前提 3])。

- 過ぐ sug;us-, sug;os-, sug;i-
- 尽く tuk;us-, tuk;as-, tuk;i-

B9.6 ③ [T6] 原他動詞が -as- により新他動詞へ

[T6] では原他動詞に -as- を付加して新たな他動詞を作ることになる。例

はほとんどないようである。例として「知る sir-」という原他動詞を構造図表中に挙げた。これに -as- を付けると「知らす sir;as-」となる。しかし、これにはさらに -e- を付けることができ「知らせる sir;as;e-」ともなる。これは [T7] である。

「知る sir-」は [T6] では、たとえば「明日知らしてあげる」「知らさない」となり、[T7] では「明日知らせてあげる」「知らせない」となる。[T7] の方が正統的で、[T6] の方はやや俗語的であるという感覚がある。このように現代語では [T6] に該当するものは、本来 [T7] に該当するものの非正規の形のように感じられる。

奈良時代にはこの構造で、「聞かせる」という意味の「聞こす kik;os-」という語があった。-as- が -os- に音転している。

B9-63) 音どろも 君が聞こさば (kik;os-aba) …… (万葉2805)

意味は「遠音だけでもあなたが聞かせてくださるなら……」である。ここでは「聞く」という原他動詞から -as- (-os-) により新他動詞が形成されている。また、「聞こす」には「貴人が他者を聞くようにする」との構造意味から、「言う」の尊敬語としての用法もあった。

B9-64) 我が背子し かくし聞こさば (kik;os-aba) …… (万葉4499)

意味は「あなたがそうおっしゃるなら……」である。



図 B9-39 音どろを君が(我に)聞こす



図 B9-40 (我に)聞こす(言う)

表 B9-6f [T6] の -as- で新他動詞を形成する原他動詞例

---

聞く kik-,            知る sir-

---

B9.7 方式 [7] 新他動詞形成(2) -as-e- による新他動詞形成

表 B9-7a 方式 [7] 構造図表

[Z7] 自 ase 他		[T7] 他 ase 他	
0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>	0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>
1		1	
2	<p style="text-align: right;">(下二)</p>	2	<p style="text-align: right;">(下二)</p>
3	<p style="text-align: right;">(下一)</p>	3	<p style="text-align: right;">(下一)</p>

表 B9-7b 方式 [7] 形式表

	連用	終止	連体	已然(仮定)	命令
0 前	sir-				
1 前	sir; as-i	sir; as-u	sir; as-u	sir; as-e	sir; as-e
前	sir; as; ë-Øi	sir; as-u	sir; as-u	sir; as-e	sir; as; ë-Øi-yo
2 奈	sir; as; ë-Øi	sir; as; Ø-u	sir; as; ur-u	sir; as; ur-e	sir; as; ë-yo
室	sir; as; e-Øi	sir; as; ur-u	sir; as; ur-u	sir; as; ur-e	sir; as; e-yo
3 現	sir; as; e-Øi	sir; as; e-ru	sir; as; e-ru	sir; as; e-reba	sir; as; e-ro

## B9.7 ① 方式 [7] について

原自動詞, 原他動詞に  $-as-e-$  が機能して,  $V;as:e-$  という形式の新しい他動詞が形成される。 $-e-$  ( $-\emptyset-$ ,  $-ur-$ ) は C の対自許容として機能する。方式 [7] は方式 [6] に許容態の加わった構造になる。

B9.7 ② [Z7] 原自動詞が  $-as-e-$  により新他動詞へ

構造図表中に詞例として「合ふ ah-」を挙げた。「心を合はせ ah;as:e-」は図 B9-41 の構造になる。「心が合う」ことを「皆」が原因者として実現させるそのことを「皆」自身が許容する, という構造である。

「話を逸らせ sor;as:e-」は 図 B9-42 の構造になる。「彼」が「話が逸る」ことの原因者であり, かつその原因者であることの許容者である。

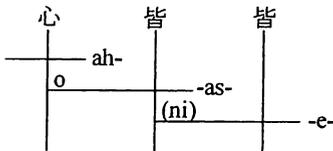


図 B9-41 心を合はせ

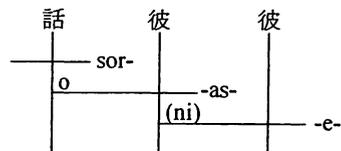


図 B9-42 話を逸らせ

表 B9-7c [Z7] の  $-as-e-$  で新他動詞を形成する原自動詞例

合ふ ah-,	潤む urum-,	絡む karam-,	利く kik-,
騒ぐ sawag-,	忍ぶ sinob-,	急く sek-,	添ふ soh-,
反る sor-,	轟く todorok-,	泣く nak-,	悩む nayam-,
覗く nozok-,	響く hibik-,	参る mawir-,	逸る sor-

「参る mawir-」は「参る + 入る maw-i=ir-u」という形の連合 (A17.2 ⑩) 動詞であり, 原動詞ではないが, 便宜的に原動詞として扱う。「参る」の意味は「A (物品等) が貴人のもとへ移動する」ことであることから, 「参らせ mawir;as:e-」は「物を差し上げる」の意味になる。現代語にはない。

また, 「(気が) 動転する 動転 =s-」(〇〇 =s-) のような自動詞として機能する併合動詞 (A17.2 ⑫) の場合も「(気を) 動転させる 動転 =s;as:e-」(〇〇 =s;as:e-) のように他動詞を形成する。

B9.7 ③ [T7] 原他動詞が -as-e- により新他動詞へ

構造図表中の詞例としては「知る sir-」を挙げた。「彼が彼女にそれを知らせる sir;as;e-」は 図 B9-43の構造になる。「彼女が知る」ことを「彼」が原因者として実現させるそのことを「彼」自身が許容する、という構造である。

現代では使用されていないが「与える」の意味の「取らせる tor;as;e-」(取らす tor;as;∅-) もこの構造である (図 B9-44)。

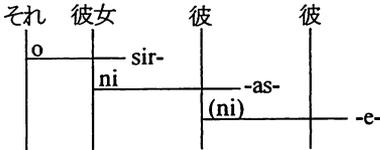


図 B9-43 彼が彼女にそれを知らせる

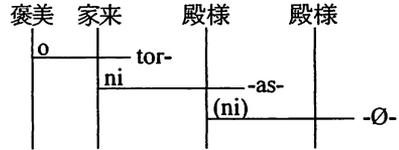


図 B9-44 殿様が褒美を取らす

表 B9-7d [T7] の -as-e- で新他動詞を形成する原他動詞例

噛む kam-	聞く kik-	食ふ kuh-	知る sir-
掴む tukam-	取る tor-	任く mak-	持つ mot-
(得る e-)			

「聞く kik-」は「聞かせる kik;as;e-」で「話す」の意味にもなる。

B9-71) 有り様 聞かせ (kik;as;e-∅) まほしけれど (源氏・夕顔)  
(話したいが)

また、「彼の歌は聞かせるよ。」「なかなか聞かせる歌だ」のように、「聞かせる (kik;as;e-)」には、「うまくて自然に聞き入らせてしまう」という意味もある。この場合は下記のように構造に特徴がある。

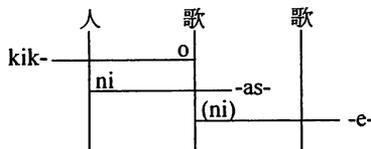
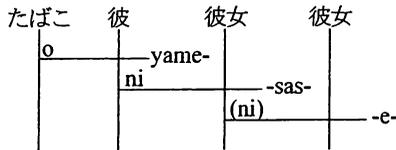


図 B9-45 (彼の)歌は聞かせる

まず、原因主体 C と、その原因態を許容する許容主体 C が他動詞「聞く」の目的語（歌）であることである。しかし、原因主体、許容主体が同一であることでは [T7] の形式になっている。次に、原因態 *-as-* の意味が「結果招来」(B2.3) であり、複合原因態 *-as-e-* の意味も「結果招来」(B4.1) であることである。ここには「人が歌を聞くことを、歌が招来し、そのことを歌が許容する」という構造意味がある。

◎ ここで、「やめる *yame-*」(厳密には *yam;e-* [Z2]) という動詞を例にとって言及しておきたいことがある。「やめる *yame-*」の場合、*-as-e-* が付くと「やめさせる *yame-sas-e-*」となる。

B9-72) 彼女が彼にたばこをやめさせる (*yame-sas-e-*)。 (図 B9-46)



(非新動詞形成態)

図 B9-46 彼女が彼にたばこをやめさせる

この場合は「やめさせる *yame;sas;e-*」という新しい動詞が形成されているわけではない。つまり、このとき *-as-e-* は「新動詞形成態」として機能しておらず、単に原因態表示を行っているだけで、機能としては「非新動詞形成態」として機能している。「非新動詞形成態」として機能するものはここでの考察の対象ではなく、あくまでも新しい動詞を形成する「新動詞形成態」として機能するものが考察の対象となっている (B8.2参照)。

さらに言えば、たとえば表 B9-7d 中の動詞「持つ *mot-*」も *-as-e-* が「新動詞形成態」として機能して「与える」という意味の新動詞「持たせる *mot;as;e-*」を生じる場合と、単に「指示他動」を表すにすぎない「非新動詞形成態」として機能して「持たせる *mot-as-e-*」という形式を生じる場合とがある。ここでの考察の対象は前者、つまり *-as-e-* が「新動詞形成態」として機能する場合である。

B9.8 方式 [8] 新他動詞形成(3) -s-e- による新他動詞形成

表 B9-8a 方式 [8] 構造図表

[Z8] 自 se 他			[T8] 他 se 他		
0	<p>(上一)</p>	0	<p>(上一)</p>		
1		1			
2	<p>(下二)</p>	2	<p>(下二)</p>		
3	<p>(下一)</p>	3	<p>(下一)</p>		

表 B9-8b 方式 [8] 形式表

	連用	終止	連体	已然 (仮定)	命令
0 前	mi-				
1 前	mi;s-i	mi;s-u	mi;s-u	mi;s-e	mi;s-i-a
前	mi;s;ë-Øi	mi;s-u	mi;s-u	mi;s-e	mi;s;ë-Øi-yo
2 奈	mi;s;ë-Øi	mi;s;Ø-u	mi;s;ur-u	mi;s;ur-e	mi;s;ë-yo
室	mi;s;e-Øi	mi;s;ur-u	mi;s;ur-u	mi;s;ur-e	mi;s;e-yo
3 現	mi;s;e-Øi	mi;s;e-ru	mi;s;e-ru	mi;s;e-reba	mi;s;e-ro

B9.8① 方式 [8] について

原動詞に原因態が -s- の形で付いて、それを原因者 (C) が許容する、という構造である。方式 [7] の -as- が -s- の形になったものであり、基本的には方式 [7] と同一のものである。-as- が -s- になるのは、原動詞が母音語幹であるためである。

B9.8② [Z8] 原自動詞が -s-e- により新他動詞へ

構造図表中には詞例として「似せる ni;s:e-」を挙げた。たとえば次のような場合で構造を示せば図 B9-47 のようになる。

9-81) <sup>うぐいす</sup> 鶯 が <sup>ほととぎす</sup> 声を時鳥に似せ (ni;s:e-Ø)

「声が時鳥に似る」という原構造があつて、それに「鶯が-s-」という構造が付くことにより、鶯が「声が時鳥に似る」ことの原因者となる。そして、鶯がその原因者となることを、許容態 (-e-) により、鶯自身が許容する。構造的にはこのような意味になっている。現代語にもこのような形で伝わっている。

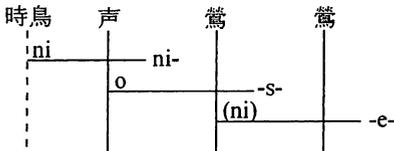


図 B9-47 鶯が声を時鳥に似せ

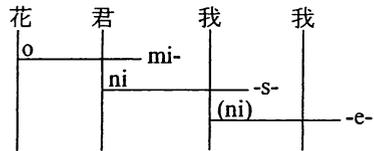


図 B9-48 我の花を君に見せ

表 B9-8c [Z8] の -s-e- で新他動詞を形成する原自動詞例

似る ni-, 寝る ne-

B9.8③ [T8] 原他動詞が -s-e- により新他動詞へ

構造図表中には詞例として「見せる mi;s:e-」を挙げた。次のような場合で構造を示せば図 B9-48 のようになる。

B9-82) 我の花を君に見せ (mi;s:e-Ø) (図 B9-48)

[Z8]と同じことが言える。「君が花を見る」という原構造があって、それに「我が-s-」という構造が付くことにより、我が「君が花を見る」ことの原因者となる。そして、許容態(-e-)により、我がその原因者となることを我自身が許容する。現代語にもこのような形で伝わっている。

「見せて mi;s;e-∅=te-∅」と言うところを「見して mi;s-i=te-∅」と言った場合は [T8] / 1 / の構造を使用したことになり、許容態を使用していないことになる。非正規的な言い方のニュアンスになる。

表 B9-8d [T8] の -s-e- で新他動詞を形成する原他動詞例

---

着る ki-	見る mi-
--------	--------

---

コラム 6 原因基としての  $-(s)as;e-$  (助動詞セル・サセル)

複合原因態として機能する原因基(旧使役基, 助動詞)の  $-(s)as;e-$  は, 原動詞であれ, 態拡張動詞であれ, 動詞に外部から「直接他動・指示他動・結果将来・不阻止」の意味を付加する要素である。これについては B4 章で触れているが, ここでこの原因基の変遷を表に示してみたい。同じく使役関係に使用される「しむ  $-asim-$ 」も示しておく。

未然形は語幹を示すので, この表では省略する (B7.4 奈良(2))。

表 Bコ6 使役基としての  $-(s)as-e-$  の変遷

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記	$-as-i$	$-as-u$	$-as-u$	$-as-e$	$-as-i-y\ddot{o}$
	$-asim-i$	$-asim-u$	$-asim-u$	$-asim-\ddot{e}$	$-asim-\ddot{e}$
奈良	$-as;e-\emptyset i$	$-as;\emptyset-u$	$-as;ur-u$	$-as;ur-e$	$-as;e-y\ddot{o}$
	$-asim;\ddot{e}-\emptyset i$	$-asim;\emptyset-u$	$-asim;ur-u$	$-asim;ur-e$	$-asim;\ddot{e}$
平安	$-(s)as;e-\emptyset i$	$-(s)as;\emptyset-u$	$-(s)as;ur-u$	$-(s)as;ur-e$	$-(s)as;e-yo$
	$-asim;e-\emptyset i$	$-asim;\emptyset-u$	$-asim;ur-u$	$-asim;ur-e$	$-asim;e-yo$
室町	$-(s)as;e-\emptyset i$	$-(s)as;ur-u$	$-(s)as;ur-u$	$-(s)as;ur-e$	$-(s)as;e-yo$
	$-asim;e-\emptyset i$	$-asim;ur-u$	$-asim;ur-u$	$-asim;ur-e$	$-asim;e-yo$
江戸前期	$-(s)as;e-\emptyset i$	$-(s)as;ur-u$	$-(s)as;ur-u$	$-(s)as;ur-e$	$-(s)as;e-yo$
	$-(s)as-i$	$-(s)as-u$	$-(s)as-u$	$-(s)as-e$	$-(s)as-e$
江戸後期	$-(s)as;e-\emptyset i$	$-(s)as;e-ru$	$-(s)as;e-ru$	$-(s)as;e-re$	$-(s)as;e-ro$
	$-(s)as-i$	$-(s)as-u$	$-(s)as-u$	$-(s)as-e$	$-(s)as-e$
現代	$-(s)as;e-\emptyset i$	$-(s)as;e-ru$	$-(s)as;e-ru$	$-(s)as;e-reba$	$-(s)as;e-ro$
	$-(s)as-i$	$-(s)as-u$	$-(s)as-u$	? $-(s)as-eba$	? $-(s)as-e$

平安の(s)の出現は態拡張による母音幹動詞の発生を物語っている。

江戸前期において許容態の省略が見られる。これは形の上では前記録時代、五段活用への回帰ということになる。いったん取り込んだ許容態を返上する現象はナ変動詞「死ぬ」にもある (B8.4i)。

なお,  $-asim;e-$  は室町よりあとは省略してある。中世以後文章語として使用され, 特に近世以後は会話では全く用いられなくなった (『日本文法大辞典』「しむ」)。

B9.9 方式 [9] 対自原因(1) -as- による敬語動詞形成

表 B9-9a 方式 [9] 構造図表

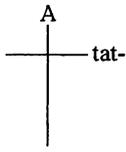
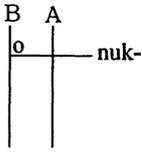
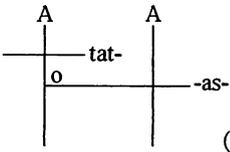
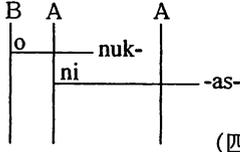
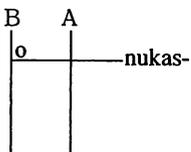
[Z9] 自 as 自		[T9] 他 as 他	
0	 <p>(四段)</p>	0	 <p>(四段)</p>
1	 <p>(四段)</p>	1	 <p>(四段)</p>
2		2	
3	なし	3	 <p>(五段)</p>

表 B9-9b 方式 [9] 形式表

	連用	終止	連体	已然 (假定)	命令
0 前	tat-				
1 奈	tat;as-i	tat;as-u	tat;as-u	tat;as-e	tat;as-e
2					
3 現	(nuk;as-i)	(nuk;as-u)	(nuk;as-u)	(nuk;as-eba)	(nuk;as-e)

B9.9① 方式 [9] について

方式 [9] は原動詞に原因態 -as- が対自の形で付くもので対自原因表現となる。これは上代語における動詞敬語形式である。古語辞典等にある助動詞

「す」(四段活用)に当たるもので、動作主体に対する尊敬・親愛の意を添える。現代語では非敬語形式にこの構造をもつものが若干ある。

### B9.9② [Z9] 原自動詞が -as- により敬語自動詞へ

[Z9] は奈良時代の動詞敬語形式である。この敬語形式は平安時代以降生産性がない。A の行為の原因者が A 自らであることを示す対自構造となっている。この構造においては、-as- の主体は話者にとって敬うべき人であり、その人が自らに行為をさせる使役的意味を持ち、その使役的意志を話者が尊いものと感じているニュアンスがある。敬意表現となる。

B9-91) 朝狩に今立たす (tat-as-u) らし (万葉3)  
(おでかけになる)

#### 表 B9-9c [Z9] の -as- で敬語動詞を形成する原自動詞例

---

思ふ omoh-, 立つ tat-, 寝(ぬ) n-

---

「思ふ omoh-」の場合、-as- が -os- と音転し、「思ほす omoh:os-」となる。

「寝(ぬ) n-」の場合、「寝す(なす) n:as- (おやすみになる)」となる。「寝す(なす) n:as-」が他動詞として機能する場合は [Z6] である。「寝る(ねる) n:e-」は [Z3] に属する。

### B9.9③ [T9] 原他動詞が -as- により敬語他動詞へ

原他動詞も敬語形式になる。

B9-92) さかし女<sup>め</sup>をありと聞かし (kik:as-i) て (古事記大国主神3)  
(お聞きになって)

「聞かす」には「聞こす kik:os-」という音転もある。これは [T6] (おっしゃる)である場合もある。

ほかの例でも、聞く kik- と同様の音転を生じているものがある。

知る sir- → 知ろす sir:os- < sir:as- お治めになる

織る or- → 織ろす or:os- < or:as- お織りになる

これは動詞語幹内の母音が a より狭いことから生じる音転である（『角川古語辞典』「す」）。

表 B9-9d [T9] の -as- で敬語動詞を形成する原他動詞例

織る or-	聞く kik-	着る ki-	為 (す) sy-
知る sir-	見る mi-		

次の場合も音転するが、これは母音接触が原因となる音韻融合による音転である。

着る ki- → 着す (けす) kes- (← ki;as-) お召しになる

為(す) sy- → 為す (せす) ses- (← sy;as-) なさる (図 B9-49)

語幹 sy- はサ変動詞語幹の推定形 (B8.4 ii) である。

見る mi- → 見す (めす) mes- (← mi;as-) ご覧になる (図 B9-50)

この「見す (めす)」から「召す (めす)」が派生した。

-as- の a が脱落することもあり、その場合は、

見す (みす) mi;s- (← mi;as-) ご覧になる になる。



図 B9-49 大君かひの神さびせす (万葉38)  
(神らしい振る舞いをなさる)



図 B9-50 大君の野辺めす (万葉4509)  
(野辺をご覧になる)

#### B9.9④ [T9] 非敬語動詞

なお、[T9] には非敬語動詞を形成する原他動詞もある。これらは現代語で使用されている。-as- を加えても基本的意味を変えないので、一種の態補強であると考えられる。

表 B9-9e [T9] の -as- で非敬語動詞を形成する原他動詞例

欠く kak-	切る kir-	溶く tok-	梳く tok-
抜く nuk-	剥ぐ hag-	揺る yur-	

たとえば「抜かす nuk;as-」の場合は次のようになる。

B9-93) 一人抜かし (nuk;as-i) て数えた。(図 B9-51)

これは -as- のない「抜く nuk-」でも言えないことはない。

B9-94) 一人抜い (nuk-i) て数えた。

「剥がす hag;as-」の場合も同様である。

B9-95) 木の皮を剥がす (hag;as-u)。(図 B9-52)

B9-96) 木の皮を剥ぐ (hag-u)。

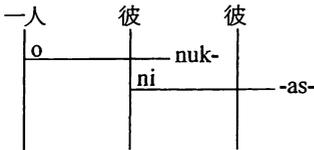


図 B9-51 一人抜かす



図 B9-52 皮を剥がす

この -as- による一種の態補強のそれぞれの語でのニュアンスについては今後の研究にまつが、現代語では態補強された形式の方が使用頻度が高いようである。意味の異なりも考える必要がある。

B9.10 方式 [10] 対自原因(2) -as-e- による敬語動詞形成

表 B9-10a 方式 [10] 構造図表

[Z10] 自 ase 自		[T10] 他 ase 他	
0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>	0	<p style="text-align: right;">(四段)</p>
1		1	
2	<p style="text-align: right;">(下二)</p>	2	<p style="text-align: right;">(下二)</p>
3		3	

表 B9-10b 方式 [10] 形式表

	連用	終止	連体	已然(仮定)	命令
0 前	kik-				
1 奈	kik;as-i	kik;as-u	kik;as-u	kik;as-e	kik;as-e
2 平	kik;as:e-Øi				
3 現					

確認できるのは、連用形 (kik;as:e-Øi), 語幹 (kik;as:e-) 使用のみである。

## B9.10 ① 方式 [10] について

この *-as-e-* は奈良時代の動詞敬語形式である方式 [9] (*-as-*) にとってかわった平安時代以降の形式である。現代語にはない。古語辞典等にある助動詞「す」(下二段活用)の一部に当たるものである。一部というのは使用の確認できる形式ということで、連用形 (*kik;as:e-Øi*) と語幹 (*kik;as:e-*) 使用のことである。「給ふ」や「らる *-rar-*」と共に使われ、また否定で使われた。

【尊敬】 A が話者から見た尊敬の対象者(自尊的な話者自身を含む)であれば、貴人が自らに行為をさせることとなり(中動態)、*-as-e-* は尊い使役意志のニュアンスを伴う。ただ、奈良時代に比べ、形式の敬意が下がったせいか、あるいは敬意の度を上げたせいか、この形式そのままでは使用されなくなり、尊敬の動詞「給ふ」や、尊敬の助動詞として機能する「らる *-rar-*」が付くことが普通となった。

【謙讓】 また、A が話者から見た謙讓表現の対象者(話者自身を含む)であって、後に付く動詞が「奉る、申す」のように謙讓を表す動詞である場合、*-as-e-* には当人が貴人のために自らを使役する意志のニュアンスを伴うことになり(中動態)、謙讓形式となる。これは奈良時代の方式 [9] にはなかったものである。

この方式 [10] は新動詞を派生する「新動詞形成態」方式と考えるよりは「非新動詞形成態」方式と考えた方がよいかもしれない(B8.2①②)。その場合は *-as-e-* を「尊敬・謙讓基」(助動詞)として扱うことになる。

B9.10 ② [Z10] 原自動詞が *-as-e-* により敬語自動詞へ

構造図表中には詞例として「入る *ir-*」を挙げた。主体 A が尊敬の対象者である場合、「入らせ *ir;as:e-*」は尊敬を表すが、ふつうこのままでは使用されず、尊敬の動詞「給ふ」が付いたり、尊敬の助動詞「らる *-rar-*」が付いたりした。

B9-101) 夜の御殿に入らせ 給ひても (源氏・桐壺)  
(お入りになつても)

「入らせ *ir;as:e-*」に「らる *-rar-*」が付く場合は、

いらせらる ir;as;e;rar-u

となるが、これは後に音転して、

いらっしゃる ir;ass;yar-u

となり、今日に伝わっている（『学研 現代新国語辞典』「いらっしゃる」）。

B9.10 ③ [T10] 原他動詞が -as-e- により敬語他動詞へ  
構造図表中には詞例として「聞く kik-」を挙げた。次のような例がある。

B9-102) これを聞かせ 給ひて (竹取・富士の煙)  
(お聞きになつて)

これは -as-e- の尊敬の例である。

「奉る tatematur-」（差し上げる）のような謙讓の動詞がこの方式をとると、  
いっそう謙讓の意を強めることになる。

B9-103) これ奉らせむ。 tatematur-as-e-mu (枕草子138)  
(これを差し上げます)

「奉る」行為を行為者自身が使役する形で -as-e- が謙讓のニュアンスになっ  
ている（「奉る」は厳密な意味では原動詞ではなく、複合動詞である。tat;e-Øi=matur-u）。

この方式 [10] においては、-as-e- が対自原因構造（中動態）となってお  
り、これが貴人の対自使役となる場合には尊敬のニュアンスになり、身分の低  
い者の対自使役となる場合には謙讓のニュアンスになる。

## コラム7 動詞「得(う)」の原動詞は「y-」か

現代語には「得る e-」という動詞があるが、これは奈良時代には終止形が「得 0-u」という形の、不思議な下二段活用動詞であった。活用は次表のとおりであり、ここには考えるべき問題が存在している。

表 Bコ7-1 動詞「得 0-u」の奈良時代の活用表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	え(甲) ë-øi	う 0-u	うる ur-u	うれ ur-e	え(甲)よ(乙) ë-yö

① 語幹部はすべて許容態詞のみである。原動詞はないのか。

② 許容態の e は乙類 ë のはずなのに、なぜ甲類 ë であるのか。

この現象を合理的に説明するためには次のように考えることになる。

① 許容態はある原動詞に作用するのであるから、この時点では省略されていた原動詞が以前存在していたはずである。② その原動詞末は乙類 ë を甲類 ë にしたのであるから、口蓋化要素のある y 音であったはずである。また、省略されやすかったのであるから、原動詞末は y 音のみであった可能性が高い。それで、原動詞は y- であったと推定できる。とすれば、あとは理論的、自動的に次の変遷を推定することができる。

表 Bコ7-2 動詞「得 0-u」の変遷推定表

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
前記1	y-i	y-u	y-u	y-e	y-i-yö
(前記2)	y;ë-øi	y-u	y-u	y-e	y;ë-yö
前記3	y;ë-øi	y-u	y;ur-u	y;ur-e	y;ë-yö
奈良	ø;ë-øi	ø;0-u	ø;ur-u	ø;ur-e	ø;ë-yö

『時代別国語大辞典 室町時代編 一』「う 得」の項では、各種資料を検討しつつ、当時は「正常な言い方とは認められなかったとしても、『ユル』の形が実際に行われていたのであろう」と結論づけている (p.655)。存在した「ユル」の形は上の推測の妥当性を支持するものであるのか、あるいは室町時代のア行(ハ行・ワ行)動詞から転じたヤ行の下二段活用を反映したもの(岩井1973:53)であるのか、今のところ決しがたい。今後の課題となっている。

B9.11 方式 [11] 新自動詞形成(3) -ay-e- による新自動詞形成

表 B9-11a 方式 [11] 構造図表

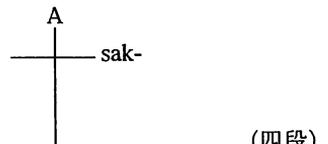
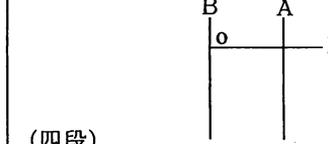
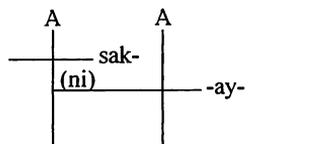
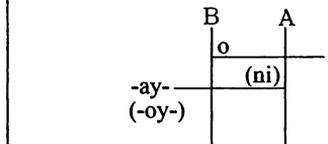
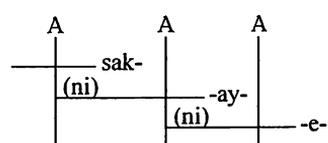
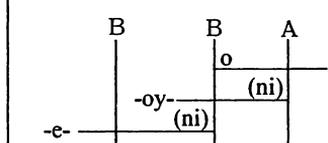
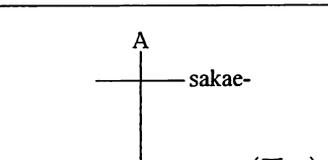
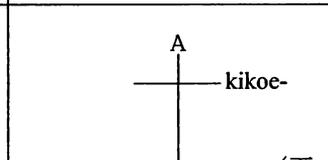
[Z11] 自 aye 自		[T11] 他 (a)ye 自	
0	 <p>(四段)</p>	0	 <p>(四段)</p>
1		1	
2	 <p>(下二)</p>	2	 <p>(下二)</p>
3	 <p>(下一)</p>	3	 <p>(下一)</p>

表 B9-11b 方式 [11] 形式表

	連用	終止	連体	已然 (假定)	命令
0 前	sak-				
1 前	sak; ay-i	sak; ay-u	sak; ay-u	sak; ay-e	sak; ay-i-a
前	sak; ay; e-Øi	sak; ay-u	sak; ay-u	sak; ay-e	sak; ay; e-Øi-yo
2 奈	sak; a; e-Øi	sak; ay; Ø-u	sak; ay; ur-u	sak; ay; ur-e	sak; a; e-yo
室	sak; a; e-Øi	sak; ay; ur-u	sak; ay; ur-u	sak; ay; ur-e	sak; a; e-yo
3 現	sak; a; e-Øi	sak; a; e-ru	sak; a; e-ru	sak; a; e-reba	sak; a; e-ro

## B9.11 ① 方式 [11] について

これは原動詞に原初の許容態  $-ay-$  が適用されてできた新語幹に、機能化した許容態が適用された形式である。

B9.11 ② [Z11] 原自動詞が  $-ay-e-$  により新自動詞へ

構造図表と形式表には詞例として「栄え sak;ay;e-」を挙げた。これは「咲く sak-」「盛る sak;ar-」と同根であり、「充実した生命が、表に向って現れ出る」意味をもつ（『岩波古語』「さか・え 栄え」）。

B9-111) 御代<sup>みよ</sup>の<sub>1</sub>栄え (sak;ay;e-)

の例では、構造の A が「御代」に当たる。「御代」が sak-「内にある生命の活動が頂点に達して外に形をとって開く（『岩波古語辞典』「さ・き」）」ことを「御代」自身が許容し、ここに「栄ゆ sak;ay-」という新自動詞が形成される。さらに「御代」が、機能化した許容態  $-e-$  をとり、「栄ゆ」を自身で許容することになる (sak;ay;e-)。現代語としては y 音が失われており、saka-e- (sak;a;e-) という形式の自動詞となっている。

原動詞「有る ar-」は「あらゆる ar;ay;ur-u」という定形化した形で今日に伝わっている。[Z11] の他の詞例は現在探索中である。

[Z11] では 3 主体すべてが同一実体である。

B9.11 ③ [T11] 原他動詞が  $-ay-e-$  により新自動詞へ

構造図表中には詞例として「聞こえ kik;oy;e-」を挙げた。これを「音が聞こえる」の形で説明する。

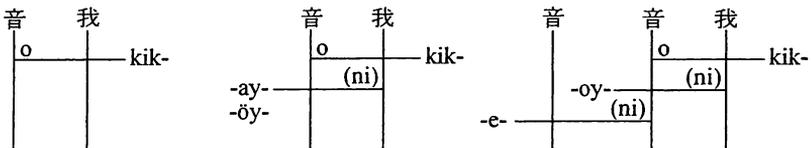


図 B9-53 我の音を聞く 図 B9-54 音の聞かゆ 図 B9-55 音が聞こえる

まず原他動詞「聞く kik-」がある（我の音を聞く、図 B9-53）。これに「音」が主体となる許容態  $-ay-$  が「我の音を聞く」の実現を許容することによっ

て、新自動詞「聞かゆ kik;ay-」が生じる（音の聞かゆ、図 B9-54）。この形式が「聞こゆ kik;öy-」という形式に音転した（B7.0参照）。次に、その構造の存在を「音」自身が -e- 許容態によって対自許容をすることによって新たな自動詞「聞こえ kik;oy;e-」が形成された（図 B9-55）。

「見える」の場合も同様に考えられるのであるが、1つ異なる要素がある。動詞 mi- が母音で終わっているために、許容態 -ay- が、古代日本語の母音連続忌避の原則のために a を失い -y- のみになった。それで、mi;ay-ではなく、mi;y-（見ゆ）の形式となった（図 B9-57）。「見える mi;y;e-」は構造形式は「聞こえる kik;oy;e-」と同じなのであるが、許容態 -ay- が -y-のみとなっている（図 B9-58）。

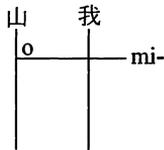


図 B9-56 山を見る

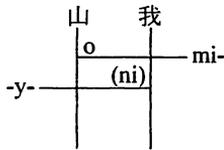


図 B9-57 山の見ゆ

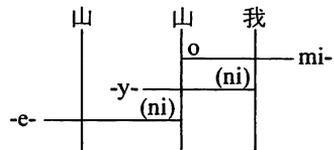


図 B9-58 山が見える

「聞こえる kik;oy;e-」「見える mi;y;e-」は、いずれも、情報（音・光）がやってきて、自然に情報受容器官（耳・目）に達すること、を意味している。いわば「（光・音）情報の自然知覚」である。「聞く・見る」に意志があるとらえる場合には「可能」の意味にもなる。

ところで、現代語では「見える mi;y;e-」は「見える mi;Ø;e-」となり、y音が失われているために、これの構造は図 B9-58 では考えにくいことになっている。幸い、-y-の主体と-e-の主体は同一（山）なので、便宜的に図 B9-58の構造を図 B9-59の構造で考えても差し支えない。それで、現代語の自然知覚の「見える」はこの構造（mi;e-）で扱うこともできる。



図 B9-59 山が見える

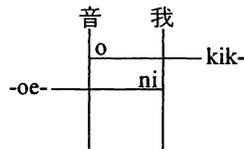


図 B9-60 音が聞こえる

一方、「聞こえる」の方も、2つの許容態  $-oy-$ 、 $-e-$  の主体がいずれも「音」で同一なので、これを便宜的にまとめれば  $-oye-$  となるが、 $y$  音が失われているので  $-oe-$  となる。これを便宜的に一つの許容態として扱えば、構造は 図 B9-60 のようにすることができる。これが「見える  $mi;e-$ 」と同じ扱いにした場合の「聞こえる  $kik;oe-$ 」である。

[T11] の他の詞例としては「嗅ぐ  $kag-$ 」がある。「情報自然知覚」の「嗅がゆ  $kag;ay;e-$ 」(においがする) は古語にはあったが、「見える・聞こえる」のような「嗅がえる」の形では現代語には伝わらなかった。

また、原動詞「言ふ  $ih-$ 」は「いわゆる  $ih;ay;ur-u$ 」という定形化した形で今日に伝わっている(「言はゆる<草薙の剣>」)というような描写は「この剣を<草薙の剣>と言ふ」という構造から生じたものと考えられる。この場合の「言ふ」は原他動詞である)。

#### B9.11 ④「聞こえる・見える」と可能動詞との関係

ここで「自然知覚」の「聞こえる・見える」と、「可能動詞」と呼ばれる「聞ける・見える」「聞かれる・見られる」の関係について考えてみたい。可能動詞は非新動詞形成態 (B8.2②) であり、新しい動詞が形成されるわけではなく、一時的に「情報知覚可能」を表すものである。「可能」であるから「聞こうとする・見ようとする」意志が前提となる(さらに制御可能性が関わる、B3.3)。

#### ◎「聞ける・見える」との関係

「聞ける・見える」は次のような構造をしている。

B9-112) これを使えば、音楽が聞ける ( $kik-e-$ )。 (図 B9-61)

B9-113) ここへ来れば、山がよく見える ( $mi-e-$ )。 (図 B9-62)

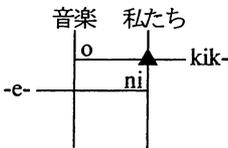


図 B9-61 音楽が聞ける

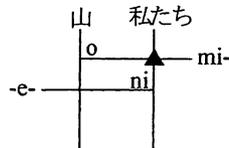


図 B9-62 山が見える

「可能」の「見える」は構造が「光情報の自然知覚」の場合(図 B9-59)と同

じになるが、こちらは「可能」なので「見る」に意志があり、これを構造上に▲(△)で表示する(B3.3)。これが異なるところである。しかし、両者とも「見える」なので、音声形式では区別することができない。

「聞ける」と「聞こえる」は、「可能」と「音情報の自然知覚」が、*-e-*と*-oe-*と異なっているので音声形式で区別できる。

「目が見える」「耳が聞こえる」についてはB9.12③参照。

### ◎「聞かれる・見られる」との関係

さらに「聞かれる・見られる」という可能形式がある。これも非新動詞形成態(B8.2②)の*-(r)ar-e-*によるものであり、一時的に「可能」を表す形式を形成する(『文法』12.5 3 受動基B)。これは個々の出来事の発生に関する(音ないし光を含む)情報を得ることを「可能」として表現することになるので「出来事情報獲得可能」と呼ぶことができる(図B9-63, B9-65)。*-(r)ar-e-*の一体化(図B9-64, B9-66)により、出来事情報も主格に置かれる。通常はこの形式が描写されて、「～が聞かれる」「～が見られる」と表現される。

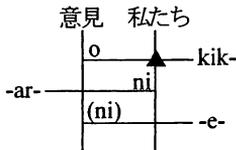


図 B9-63 意見を聞かれる

一体化 ⇒



図 B9-64 意見が聞かれる



図 B9-65 現象を見られる

一体化 ⇒

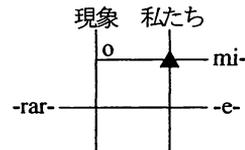


図 B9-66 現象が見られる

ここで、以上の「聞く・見る」それぞれの形式の関係を表にしてまとめれば表 B9-11c のようになる。

表 B9-11c 「聞く・見る」の諸形式の関係

	聞く	見る
a) 光・音情報 自然知覚		
	<p>(音が)聞こえる (聞こゆ)</p>	<p>(山が)見える (見ゆ)</p>
b) 光・音情報 獲得可能	<p>(音楽が)聞ける</p>	<p>(山が)見える</p>
c) 出来事情報 獲得可能 (光・音+α)	<p>(意見が)聞かれる</p>	<p>(現象が)見られる</p>

注) a) 「光・音情報自然知覚」でも、「聞く・見る」に意志がある(▲△)と感じられる場合には「可能」の意味を伴う。また c) 「出来事情報獲得可能」でも、「聞く・見る」に意志がない(▼▽)と感じられる場合には「自然知覚」の意味になる。

「嗅ぐ」の場合は形態的には、a) 嗅がえる  $kag:a(y)e-$ 、b) 嗅げる  $kag-e-$ 、c) 嗅がれる  $kag-ar-e-$  となる。現代語には、a) がなく、c) も微妙である。代わりに「匂いがする」等の表現を使用している。

B9.12 方式 [12] 非o格客体の主体化

ある態構造による新動詞形成

表 B9-12a 方式 [12] 構造図表

[Zn] 自 ○ 自/他		[Tn] 他 ○ 他/自	
0		0	
1		1	
2		2	
3		3	

B9.12① 方式 [12] について

[Zn] [Tn] の構造は、原動詞の ni 格を中心とする非o格客体が態属性の主体となる構造である。どの態属性が使用されるかは場合によって異なるので、記号表示では「○」を使用して「自 ○ 自/他」のようにする。

## B9.12② [Zn] 原自動詞がある態構造により新動詞へ

構造図表中に [Zn] の詞例として挙げたのは「泣く nak-」である。たとえば表中の A を「私」、X を「(この)映画」とすれば、図 B9-67 のような構造となり、次のような例文となる（「笑う wara(w)-」も同様に扱える）。

B9-121) 私は (この) 映画に泣く。

「泣く」は自動詞であり、ここには目的語が存在していない。「(この)映画」は「泣く」原因を表す ni 格に立つ実体（名詞）である。

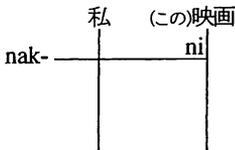


図 B9-67 私は (この) 映画に泣く



図 B9-68 (この) 映画は泣ける

この ni 格実体が許容態 -e- を主体として持つことになると図 B9-68 のようになる。構造意味としては「私が泣く」ことを「(この)映画」が許容している。表層文では「(この)映画」が主語となり、次のような文になる。

B9-122) (この)映画<sub>i</sub>は泣ける。

「私」が「泣く」意志を持っている、と話者や聞き手が考えれば、この文は「泣くことができる」という「可能」の意味になり、「私」が「泣く」意志を持っていないと考えれば、この文は「自然に泣いてしまう」という「自然生起」の意味になる (B3.2, B3.3参照)。

また、nak- と -e- が一体化した場合は「私」も主格となり、「私<sub>i</sub>が泣ける映画」のような句が可能となる (B3.3)。

このように、原自動詞の ni 格実体が態構造の主体となって主語として表層化される場合は、この方式 [12] で扱うことになる。

なお、「この椅子が座れる／座れない」の「座れる」は拡張新動詞ではなく、単なる可能表現であるが、この構造である (図 B9-69)。

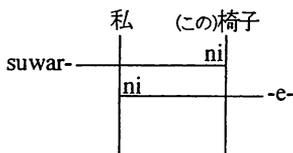


図 B9-69 (この)椅子が座れる

B9.12 ③ [Tn] 原他動詞がある態構造により新動詞へ

[Tn] は原動詞が他動詞である場合である。

a) 非 o 格客体が ni 格にあり、これが主格になる場合

たとえば他動詞が「授ける」である場合、次のような例文となる。

B9-123) 神様が夫婦に子どもを授ける。

この文の構造は図 B9-70 のようになっている。これは [T3] 2 の構造に ni 格実体 (夫婦) を加えた形式であり、[T3] 形式の一つのあり方である。

ここで今、ni 格実体「夫婦」を受影態 -ar- の主体とすると、図 B9-71 のような構造になる。これを表層化して、次の文が得られる。

B9-124) 夫婦が神様に (から) 子どもを授かる。(図 B9-71)

ここでは「授ける」という他動詞から別の新たな他動詞「授かる」が生じている。他動詞に受影態 -ar- が適用されるとき、ふつうは o 格実体が -ar- の主体となり、o 格実体が主語として表層化され、新自動詞が形成される ([T4] [T5]) のであるが、このように ni 格実体を受影態の主体となる場合には、o 格実体はそのまま保たれることになり、自動詞ではなく他動詞が新たに形成されることになる。

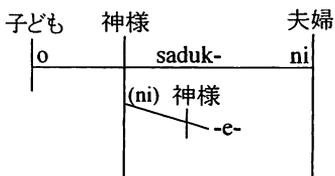


図 B9-70 神様が夫婦に子どもを授ける

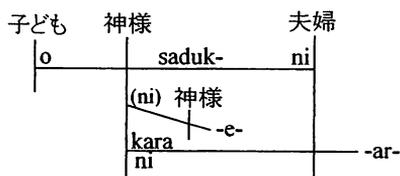


図 B9-71 夫婦が子どもを授かる

「預く aduk;e-」もこのタイプで、他動詞「預かる aduk;ar-」を生じる。

B9-125) 銀行にお金を預ける。(aduk;e-)

B9-126) 銀行がお金を預かる。(aduk;ar-)

「教ふ wosih;e-」もこのタイプであるが、新他動詞「教はる wosoh;ar-」を生じたのは江戸時代以降である(『日本語文法大辞典』)。(wosih;e- は -ar- による態拡張を受けて wosih;ar- となる際に、前の o と後ろの a の影響により i が広がり o となって、wosoh;ar- という形式になった。)

B9-127) 先生が私に俳句を教へる。(wosih;e-) (図 B9-72)

B9-128) 私が先生に俳句を教はる。(wosoh;ar-) (図 B9-73)

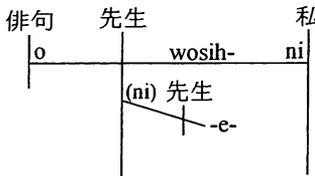


図 B9-72 先生が私に俳句を教へる

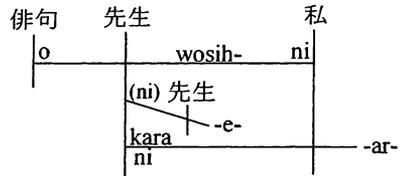


図 B9-73 私が先生に俳句を教はる

### 動詞「食べる」の構成

また、現代語の「食べる tabe-」もこの [Tn] 構造であると考えられる。ただし、態拡張は受影態 -ar- ではなく、許容態 -e- によってなされている。

「賜ふ tamah-」という動詞があり、意味は「目上の者が目下の者へ物を与える」であった。これが音転して tamb- 形を経て「賜ぶ tab-」という動詞になった。この音転に関して『岩波古語辞典』「た・び」の項には、

tamaFi → tamFi → tambī → tabi

とある。本文法では -i は連用描写詞であり、語幹内にはない考えるので、

tamah-i → tamh-i → tamb-i → tab-i

との表記になる。

ここに成立した「賜ぶ たぶ tab-」(目上の者が目下の者へ物を与える) が原動

詞となり、許容態が加わって図 B9-74 の構造が形成された。

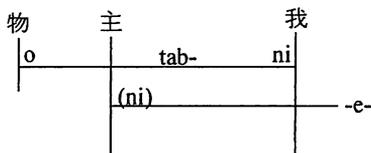


図 B9-74 我の物を食べ(いただく)

この構造では、目上の人「主<sup>あまじ</sup>」が「我」に「物」を「与え (tab-)」、それを「我」が許容する、という構造意味になっている。表層では、目上の人から謙譲の気持ちで物をいただく、という意味になる。後に、だれが与えるか、という視点が消失して、単に「いただく」という意味の「食ぶ (tab:e-)」(下二段活用) (図 B9-75) になり、これが今日の「食べる tabe-」(図 B9-76) のもととなった(『小学館古語大辞典』等参照)。

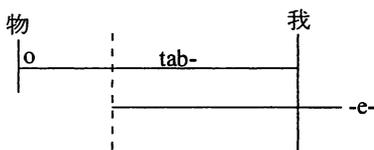


図 B9-75 我の物を食べる

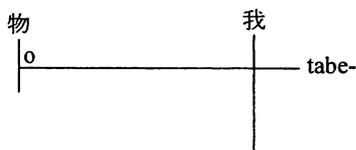


図 B9-76 我の物を食べる

b) 非o格客体が de 格にあり、これが主格になる場合

たとえば他動詞が「聞く」である場合、次のような例文となる。

B9-129) 人が耳で音を聞く。

この文の構造は図 B9-77 のようになっている。

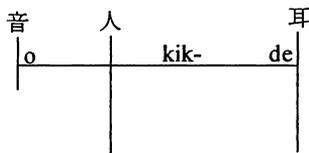


図 B9-77 人が耳で音を聞く

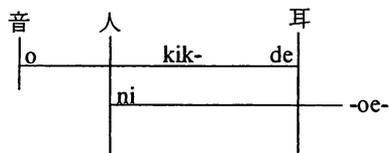


図 B9-78 耳が聞く

この構造の de 格客体を主体にする形で許容態を関わらせると、次のような例文ができる(このとき「音」を描写することはできない)。

B9-1210) 耳が聞こえる (kik;oe-).

図 B9-78のような構造になるが、これは簡略構造図で、正しくは図 B9-79のようになる。

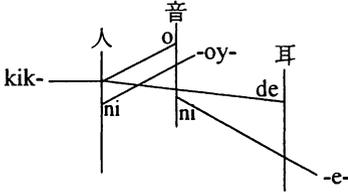


図 B9-79 耳が kik;oy;e-

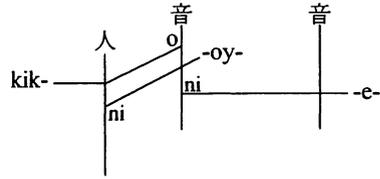


図 B9-80 音が kik;oy;e-

ここにある構造意味は「人が(耳で)音を聞くことを音が許容する。その音が許容する事態を耳が許容する」ということである。

ちなみに、図 B9-80は「音が聞こえる」の構造である(図 B9-55と同じ)。

「目が見える mi;y;e-」も同様に考えることができる。

以上、B 9 章においては動詞態拡張の各方式について論じた。

